

平成17年度

学生ボランティア活動の 支援事業に関する報告書

学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い
体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー

平成18年3月



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

目 次

はじめに

I 平成17年度「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」実施報告

開催概要	7
プログラム	8
開会・挨拶	11
第1部 全体会	
講演 「ボランティア活動の推進による地域教育力の再生」	13
シンポジウム 「大学になぜボランティアセンター機能が必要なのか」	19
第2部 分科会	
第1分科会 「学生部職員のためのボランティア入門」	41
第2分科会 「ボランティアセンターのつくりかた」	43
第3分科会 「実践的ボランティアコーディネーション術」	45
第4分科会 「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」	47
第5分科会 「学生が結ぶボランティアネットワーキング」	51
参加者アンケート	
集計結果「総括表」	53
集計結果「詳細」	57
アンケート様式	69
参加者内訳	71
参加大学・機関等一覧	72

II 平成17年度「体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー」実施報告

事業計画	75
体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー実施一覧	76
各支部の実施報告・参加者アンケート	77
札幌支部	79
仙台支部	93
東京支部	105
金沢支部	125
名古屋支部	133
京都支部	157
大阪・神戸支部	173
広島支部	185
松山支部	209
福岡支部	237
大分支部	247
※〔参考〕大阪支部（平成16年度実施分）	271
参加者アンケート	281
実施全支部の集計結果「総括表」	287
アンケート様式	295

はじめに

独立行政法人日本学生支援機構は、平成16年4月、奨学金貸与事業、留学生支援事業、学生生活支援事業を通じて、次代の社会を担う豊かな人間性を備えた創造的な優れた人材を育成するとともに、国際理解・交流の推進を図ることを目的として発足いたしました。

創設2年目を迎え、大学等の学生支援業務をリード・サポートする中核機関として、社会のグローバル化や多様化にきめ細かく対応し、日本人学生と外国人留学生の双方に対する総合的な支援事業を実施しております。

学生ボランティア活動については、平成7年の阪神・淡路大震災を契機として社会の注目を集め、各大学等においても、正課教育への取組みや学生ボランティアセンターの設置など、様々な支援を行っています。

また、平成14年7月には、中央教育審議会から「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申があり、今日の青少年をめぐる様々な問題を解く糸口として「奉仕活動・体験活動」を奨励・支援することの重要性が説かれ、大学等を含め、社会全体で活動を推進していくための仕組みや社会的機運の醸成の必要性が提言されています。

こうした状況の中にあって、日本学生支援機構は、平成17年度も、学生ボランティア活動支援事業の一環として、全国の大学等の学生ボランティア活動支援担当教職員、ボランティア関係機関、団体担当者及び学生の参加による「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」を実施し、また、日本学生支援機構の全国の各支部において、各地域の大学等及び関係団体と連携を図り、「体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー」を実施いたしました。

本報告書が、大学等及び地域社会における学生ボランティア活動を支援・促進するための参考資料となれば幸いに存じます。

末筆ながら、本事業を実施するにあたって、ご多忙の折にもかかわらず様々な形でご協力をいただきました関係者の皆様に対し、心からお礼を申し上げます。

平成18年3月

独立行政法人 日本学生支援機構

平成17年度

学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議集い

実 施 報 告

開催概要

◆ 趣 旨

今、大学等において、学生が行うボランティア活動等を積極的に奨励するため、正規の教育活動として、学内外における社会体験・地域活動を視野に入れた取組みが社会的にも注目されています。中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の中でも、大学等における奉仕活動等の奨励・支援についても重要視されており、地域等において大学生のもつ潜在的な力に対する期待感は日増しに高まっています。

また、さまざまな場において、大学等とボランティア関係団体との情報交換や緊密な連携・協力が強く望まれています。

このような状況を踏まえ、大学と関係機関・団体の担当者間の連携・協力をさらに推進するために、それぞれの具体的な取組み事例や課題等についての情報や意見交換等を行います。

◆ 主 催

独立行政法人 日本学生支援機構

◆ 講 演

文部科学省

◆ 日 時

平成17年12月8日（木） 10：30～17：30

◆ 会 場

東京国際交流館 プラザ平成（お台場）

東京都江東区青海 2-79 TEL：03-5520-6001

◆ 対 象

全国の大学・短期大学及び高等専門学校のボランティア活動支援業務担当教職員、ボランティア関係機関、団体担当者及び学生

◆ 企画実行委員会委員

興 梶 寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長

栗 田 充 治 亜細亜大学国際関係学部 教授

平 野 吉 直 信州大学教育学部 教授

小 拔 隆 東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター

プログラム

◆ 開 会 10:30

☆ 挨拶 独立行政法人日本学生支援機構 理事 大浦 道徳

☆ オリエンテーション

◆ 第1部 全体会 10:40

☆ 講演 「ボランティア活動の推進による地域教育力の再生」

山本 昌博 文部科学省生涯学習政策局社会教育課ボランティア活動推進専門官

☆ シンポジウム 11:00~12:30

「大学になぜボランティアセンター機能が必要なのか」

全国の大学において、いまさまざまな学生のボランティア活動支援への取り組みが行われています。ボランティアセンターというかたちに拘らず、それぞれの大学の特色を生かして、学生・教職員のさまざまな取り組みをサポートするための持続可能なコーディネーションシステムをどう築いていけばいいのかについて、実践例をふまえながら探ります。

総合司会：興 裕 寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長

シポジスト：田中 芳 則 広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室 助教授

山本 和 国際基督教大学 総務理事

和栗 百 恵 中央大学総合政策学部 特任講師

◆ 情報交換会（ランチセッション） 12:30~14:00

◆ 第2部 分科会 14:00~17:30

第1分科会 「学生部職員のためのボランティア入門」

コーディネーター 興 裕 寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長

ボランティア活動は、学生が活動をとおして、自己や社会、そしてより深い学びと出会うための限りない教育力を秘めています。また、大学とコミュニティを「必要としあう」双方向の関係に結び社会に活力をもたらします。「入門編」分科会をとおして、大学はなぜボランティアに取り組むのかについて探ります。

第2分科会 「ボランティアセンターのつくりかた」

コーディネーター 小 抜 隆 東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター

学生の社会参加と学びを探るために、ボランティアセンターはどのような機能・役割を担い、どんな運営をすればよいのでしょうか。「これから設置する」、「いままさに運営している」という皆さんと一緒に意見・情報交換をとおして魅力的なボランティアセンターづくりについて考えます。

第3分科会 「実践的ボランティアコーディネーション術」

コーディネーター 村 田 素 子 聖心女子大学 学生部マグダレナ・ソフィアセンター

ボランティアコーディネーターとは？コーディネーションって？大学でのボランティア推進を担う皆さんは戸惑うことも多いでしょう。大学生の特性を知った上での主体性を引き出すプログラムづくりについて、実践事例を交えて意見交換をしながら考えていきます。

第4分科会 「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」

コーディネーター 栗 田 充 治 亜細亜大学国際関係学部 教授

ボランティア活動をはじめ、大学の地域連携・社会貢献の取り組みが盛んになっていますが、大学におけるボランティア推進は教育と切り離せません。ボランティア関連科目の運営事例や、一般授業の中でボランティアに結びつける体験学習の試み等を取り上げ、大学の教育活動の新しい展開の方向を探ります。

第5分科会 「学生が結ぶボランティアネットワーキング」

コーディネーター 今 井 治 SVnet 事務局コーディネーター

学生による、学生のための分科会です。ボランティア活動を進める上での悩みや工夫、ぶつかっている壁や将来の展望等について、学生の目線で語り合います。大学間のネットワークづくりのきっかけとなる分科会です。参加される方はできるだけ実践事例をご用意ください。

開 会

挨拶

独立行政法人 日本学生支援機構理事 大浦 道徳

ただ今ご紹介いただきました日本学生支援機構理事の大浦でございます。本日はこの集いを開催するにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は、皆さま全国各地からご参集いただき、誠にありがとうございます。また、文部科学省からは、生涯学習政策局社会教育課の山本専門官、各シンポジスト、分科会のコーディネーター、各先生方も大変お忙しい中、ご出席いただきご協力をいただいております。誠にありがとうございます。



私ども支援機構は、今後とも皆さま方に対し、より有意義な研修会を実施いたしますとともに、学生のために総合的な支援事業を行う機関としまして、業務をより効果効率的に行っていく所存であります。それには大学、または関係者の皆さま方のご支援・ご協力が不可欠であります。今後とも支援機構に対しまして、引き続きよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

ちょうど良い機会でありますので、私ども支援機構の今の状況等について、簡単にご説明申し上げます。

ご存じのように、奨学金の貸与事業、留学生事業、その他学生生活支援事業、大きくはこの3つの事業を行っております。

奨学金事業につきましては、旧育英会から引き継いでおりまして、現在までに700万人の学生を排出しております。金額にして6兆円の貸与を行ってきたわけでありまして。今後とも今の状況でいきますと、家計支持者の離職や自殺を含めた事故等による家計急変、未だに社会の全体の中には、学生の親御さん達のそういう状況があり、奨学金はこれまでと変わらず、必要とされております。これからも勉学意欲のある学生を経済的に支援し、我が国の次代を担う人材の育成に貢献してまいりたいと思っております。ご参考に申し上げますと、平成18年度の概算要求におきましては、まもなく政府原案がでる予定であります。無利子・有利子ともに、新たな奨学生の採用ができますように、新規増員の要求を行っております。

留学生支援事業につきましては、国費奨学金の支給、宿舍の整備、日本留学試験の実施などを行っております。留学生受入れに際しましては、既にこの5月で12万2,000人を超えております。今後は留学生の確保にさらなる質の向上が課題であります。これからの留

学生が安心して留学に励み、将来、我が国に好印象を持って帰国し、今後の我が国の良き理解者となってもらえるよう、そういう留学生を全力で支援してまいりたいと考えております。18年度につきましては、私費留学生在が極めて増えておりますので、そういう学生に対する学習奨励費の増員をお願いしているところであります。

3つ目の学生生活支援事業ですが、大学、高専等における教職員の皆さま方のお役に立てるよう学生指導・就職関係などの分野につきまして、各種研修会等の開催を行っております。また、情報の収集・提供にも努めてまいり所存であります。今年度につきましては、全国各地31回の研修会等を開催しましたところですが、学生相談業務に何が支援できるかという視点で、大学のいわゆる相談窓口の件数が増えている、そういう状況を踏まえ、なんらかの支援策が必要だろうということで、学生相談体制の整備に資する調査・研究会を機構の側に立ち上げまして、関係の学識の先生方のご協力を得て、検討を開始したところです。現在の社会状況の変化とともに、学生を取り巻く環境、価値観とも、次第に変わってきております。それに即した対応が求められるところではありますが、この集いにおいて、さまざまな情報を収集し、活発なご議論をいただき、新たな時代に対応していくための糧にさせていただけたら幸いだと思っております。

学生ボランティア活動につきましては、皆さま既にご承知のように、阪神淡路を契機としまして、地域社会における学生自身のボランティア意識も急速な高みを見せているところでもあります。最近では新潟中越地震に際しましても、学生ボランティアの活躍が報道されたところでもあります。このような活動の積み重ねの結果、学生のボランティア活動は、地域から頼られ、益々期待されてくるものと確信しております。一方、これからの大学等に期待されることとして、地域貢献・地域連帯が重視されております。学生ボランティアはまさしく地域と密着した活動であります。また、学生にボランティア活動のきっかけを与え、裾野を広げていくことが、若者の育成に必要ではないかと考えております。既に積極的に行動している学生のボランティア活動を受入れ機関やボランティア団体、地域の行政機関と緊密に連携しながら、これらの支援・促進していくことは私どもの重要な課題であると考えております。

本日のこの集いのシンポジウムにおきまして、各テーマの中で、それぞれ事例紹介、情報交換、意見交換をしていただき、さまざまな課題の解決に寄与できれば幸いと考えております。最後になりましたが、この集い開催のご準備などに多大なご協力をいただきました企画実行委員の各先生方に厚く御礼を申し上げます。また、ここにご出席の皆さま方にとりまして、実りあるものとなりますよう祈念致しまして、簡単ではありますが私の挨拶と代えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

第1部 全体会

1. 講演

「ボランティア活動の推進による地域教育力の再生」

文部科学省 生涯学習政策局社会教育課

ボランティア活動推進専門官 山本 昌博 氏

どうも皆さん、おはようございます。本日はこういう会にお招きをいただきまして、ありがとうございます。本来であれば、高等教育局の方からご説明すればよろしいのですが、生涯学習政策局社会教育課の山本からご説明申し上げたいと思います。



資料がございますので、それに沿ったかたちでご説明させていただきます。そもそもボランティア活動につきましては、災害ボランティアであれば内閣府や国土交通省が所掌し、介護とか福祉関係なら厚生労働省というようなことで、文部科学省におきましては、学校教育あるいは社会教育にご支援をしていただくボランティアのほか、児童生徒、あるいは地域住民の方々がボランティア活動を理解したり、あるいは関心を持つようなきっかけづくりということに努めているところです。大学での単位認定なども、そのきっかけづくりのひとつになるのではないかと思います。

資料に、奉仕活動・体験活動ということが載っております。どちらかというところ、大学というよりは小・中学校・高校、あるいは地域住民を主に対象にしているような事業が多いので、奉仕活動あるいは体験活動というような括りにしております。

教育改革国民会議が、平成12年に報告を出しております。この時代的な背景としては、佐賀の高校生の西鉄のバスジャック事件というのがございました。そういった青少年の凶悪事件が多発しているということなども背景に、教育改革国民会議の報告の中で人間性豊かな日本人を育成するということで、奉仕活動を進めることが必要であると提言されました。提言の内容が3つあり、その(3)に将来的には満18歳前後の青年が、大学1年生や2年生相当の年齢だと思っておりますが、そういった年齢時に一定期間、さまざまな分野において、奉仕活動を行うことを検討すると、ここまで提言しているわけです。検討するということは、何らかの形でそのような経験を大いに積んでもらった方がいいということです。

この報告を受けて、平成13年7月に学校教育法と社会教育法を改正し、青少年に対するボランティア活動の奨励などにつきまして、市町村教育委員会の事務として明確に規定しました。さらにその後、平成14年の中教審答申、これは青少年の奉仕活動等の推進につい

て答申したのですが、18歳以降の個人が行う奉仕活動等の奨励支援のために、大学などにおいて、学生が行うボランティア活動などを積極的に奨励するよう、正規の教育活動として、ボランティア講座やNPOに関する専門科目等の開設、あるいはインターンシップなども含め、学生の自主的なボランティア活動等の単位認定を積極的に進めたり、学生の自主的な活動を奨励・支援することが重要としています。そのために、大学ボランティアセンターの開設など学内のサポート体制の充実、セメスター制の導入、ボランティア休学制度など、学生達が活動しやすい環境整備をしたり、大学の学内でボランティア活動等の機会の提供などに取り組むことが望ましいということをご提言いただいています。

では、文部科学省では実際にどういうことをやっているかという、ボランティア活動そのものに対する予算は、生涯学習政策局で措置しておりますが、これ以外に直接的な予算は省内ではないというような状況で、事業費については来年度も今年度と同額の5億7,100万円を概算要求しているという状況です。ボランティア活動は自主的・自発的な活動で、また、様々な分野にまたがるということで、どうしても予算要求までには至っていないという状況です。また、財務省の方にもボランティア活動の予算要求をすれば、「なんでボランティアなのにお金が必要なのか。」というように質問を受けるわけですが。しかし、ボランティア活動を行うにあたっては、例えば指導者がいたり、活動する際にも、清掃ボランティアであればゴミ袋が必要であったり、旅費が必要になったりとか様々な経費が必要になりますので、そういったことにはどうしても自発的活動であっても必要になります。我々もきっかけづくりということで、こういった地域でのボランティアの取組をさらに広げていただくために、予算措置をしているということです。

事業は大きく2つに分かれておりまして、広報啓発、それから地域のボランティア活動推進事業というモデル事業の2本立てです。モデル事業のイメージ図がありますが、全国705地域で、対象を子供から高齢者までの幅広い年齢層の住民を相手にした事業と、それから高校生に特化した事業の、2つに分かれています。

事業内容については、花植えボランティアや清掃ボランティアなど、様々な活動をいろいろな場所で実施していただくもので、きっかけづくりのためにも、是非大学生の方々もこうした活動にご参加いただければと思います。また、本日ご出席の大学生の方々におかれましては、様々なボランティア活動を体験された方もいらっしゃると思いますので、指導者あるいは助言者として活躍していただければと、ご期待申し上げるところでございます。こうした事業は、市町村の教育委員会等で企画していますので、大学のサークル等でこういった事業を行って地域を良くしたいというようなことがありましたら、市町村の教育委員会に事業企画を持ち込むなどしていただければと思います。

具体的な取組例を参考にいただければと思いますが、この資料自体が財務省に説明した資料で、所要経費が入っていますので、この辺は無視していただければと思います。

資料に、様々な地域でのボランティア活動を少し取りまとめたものがございますので、

ご参考にしていただければと思います。

この事業が2本立てということで、もう一つのボランティア活動の広報啓発普及事業というものがございます。3,000万円ぐらいの事業ですが、ボランティア活動の推進のための全国フォーラムの開催や、ポケモンをイメージキャラクターとして使ったポスターを全国の小・中学校、あるいは社会教育施設などに配布しておりますが、是非皆さんもお持ち帰りいただき、目立つところに張っていただければと思います。さらには、ボランティアに関するホームページも設けておりますので、是非アクセスしていただき、ご覧いただければと思います。

今年の全国フォーラムについては、「フォーラムの開催」というのがございます。2月18日に、TOKYO FMホールにおきまして全国フォーラムを、また西日本大会ということで、山口県のご協力を得まして、1月15日にも地方のフォーラムを開催することとしております。まもなく文科省のホームページにも詳細をアップする予定でございます。1月15日のフォーラムでの基調講演は、この後のシンポジウムの総合司会をされます興梠（こおろき）先生をお願いしておりますので、是非こちらにもご参加いただければと思います。

次に、地域における防犯教育等の推進について、警察庁と連携しまして、安全・安心な地域を創っていこうということで、犯罪対策閣僚会議の「安全・安心なまちづくり全国展開プラン」の中にも盛り込まれております。公民館は全国で1万8,000館ありまして、こうした社会教育施設を活用して、防犯に関する講座等を実施する際には、警察官や警察のOBの方々が指導者となっていたり、あるいは先ほどの地域ボランティア活動推進事業で防犯を取り上げたときのオリエンテーションなどで、警察官などの指導・助言、場合によっては一緒に巡回していただけるというものです。本年6月末現在で、防犯のボランティア団体が全国で1万4,000団体ございまして、15年末では3,000団体ということで、この1年半で4.6倍と大幅に増えております。また、構成員も80万人で、15年末の18万人と比べてこちらも4.5倍と大幅に増加しています。

具体的な例として、仙台市のボランティア活動の新聞情報を載せておりますが、フリーターやここでは東北大学の学生が防犯グループを結成して、活動しているというもので、このほかに島根大学の方でも職員や学生さんが公民館や地域住民と協力してパトロールなどを行っているというようなことも伺っております。こうした取組をぜひ積極的に実施していただければと思います。

また、11月22日には広島市、あるいは12月1日に今市市で下校途中の女子児童が事件に遭い、殺害されるというような、あってはならない事件が連続して発生いたしました。再び起こらないよう、こういった活動にも是非目を向けていただければと思います。

さて、文部科学省が大学について全く何もやっていないというわけではなく、私どもがシンクタンクをお願いをし、ボランティア活動の先進的な事例を集めました。この報告書

の第1部だけを本日資料として掲載しておりますが、全体版は、文部科学省のホームページに掲載しておりますので、ご覧いただければと思います。

それでは、第1部ですが、ボランティア活動の運営にあたりましては、企画段階、活動準備、活動実施、事後に分けて留意すべき点を整理しています。内容については、主に地域での活動を想定しているわけですが、報告書の中に大学生のボランティア活動が幾つか紹介されています。

例えば、麻布大学の淵野辺ボンバイエというのがございます。これは、環境保健学部の村山ゼミのゼミ生が中心となって、参加型の交流イベントを企画運営しているもので、学生、子供達、NPOなども含めて、新たな交流・つながりをつくるために、大学の「地域連携プラットフォーム」シンポジウム、あるいは学生と商店街の活動を紹介する「淵野辺スライドショー」とか「子供エコ探検ツアー」報告会とか、そういったさまざまな交流事業が行われています。

東北福祉大学のボランティアセンターの例を示しておりますが、学外より広くボランティアの依頼を受け付け、情報提供を行うことで活動を斡旋しています。学生のボランティア活動について、年間1単位を上限として単位認定をしている状況です。

広島市のユースボランティア・サポートセンターは、市の教育委員会が、広島市に住む学生を対象とし、活動内容は小・中学生の体験・交流活動の機会を紹介したり、ボランティア希望者とのマッチングやボランティア研修などを実施しているということです。

高知のTMOエコスターズでは、高知市の商工会議所が高知女子大学に呼びかけまして結成された学生の団体「エコスターズ」が、清掃をはじめとした商店街の活性化に向けたさまざまな活動を行っているという事例です。

さらには、明海大学につきましては、副専攻キャリアアッププログラムとして、実際の活動実習を含んだボランティアの授業を設置しております。また、浦安市からボランティアのメニューが提供され、そこから学生が自由に活動を選択でき、活動終了後には市から活動証明書が発行されるというようなことで、浦安市が大きくバックアップしているというような事例です。

このほか、この報告書には北海道医療大学のボランティアセンターの事例なども紹介されており、どの事業も年々活発化しているというような状況のようです。それぞれの参考事例の詳しいことが第2部にごございますので、是非お帰りにになりましたらホームページをご覧いただければと思います。

最後に文部科学省のボランティア活動、体験活動の事業の一覧表を資料に掲載しております。これは概算要求ベースでお示ししておりますが、ご参考にしていただければと思います。

学生の皆さまが、今後一層ボランティア活動に関心を持っていただき、積極的に活動をしていただければと思いますし、ボランティアの活動の指導者、あるいは助言者としても

ご活躍いただきたいと思います。また、先生方や事務局の方々におかれましても、学生のボランティア活動のご支援をよろしくお願ひしたいと思いますが、事例にもございますように、大学内だけで完結するということでは決してありませんので、広く様々な行政機関、あるいはNPOなどとも連携し、ボランティア活動の輪を広げていただきたいと思います。

内閣府が、本年度実施しました世論調査を見ますと、国民の6割の方がボランティア活動に参加したいという状況ですので、当然学生の方々も参加したい方は多いというふうに思っております。ボランティア活動に対する大学の予算措置というのは、なかなか難しいというような状況だと思いますが、例えば、先ほどありましたように、単位認定を行うとか、学長がボランティアをしている人たちを呼んで食事会を開くとか、そういった何らかのインセンティブを考えていただき、ボランティア活動の輪を広げてもらいたいと思います。また、学生達が、がんばっているということを副学長や学長、理事長なりに報告していただくことも大変重要であると思います。また、こういった例は、私立大学では結構やっているのですが、国立大学のボランティア活動に対する取組というのは、どちらかという流れに任せているような感じではないかと思っております。大学がボランティア活動を活用するという発想は良くないかもしれませんが、是非大学の社会貢献の1つとしてがんばっていただければと思いますし、皆さま方個人の年度目標として掲げていただければと思います。

以上、簡単でしたが、文部科学省の取組を紹介させていただきました。また、何か困ったことがありましたら、私どもにご相談いただければと思います。本日は、どうもありがとうございました。(拍手)

2. シンポジウム

「大学になぜボランティアセンター機能が必要なのか」

<総合司会>

興 栢 寛 氏（社会福祉法人世田谷ボランティア協会理事長）

<シンポジスト>

田中 芳則氏（広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室 助教授）

山本 和氏（国際基督教大学 総務理事）

和栗 百恵氏（中央大学総合政策学部 特任講師）

興 栢 皆さん、こんにちは。興栢と申します。今日は、主催者の日本学生支援機構のお話では200人を定員として集まっていたというお話を聞いていたのですが、250人というたくさんの方にご参加いただきまして、私自身もこの企画の実行委員会に参加をしております。感謝を申し上げたいと思います。今から1時間半ほどの短い時間なのですが、今日は3人のゲストの皆さまをお迎え致しまして、シンポジウムをさせていただきます。



今日のテーマは、「大学になぜボランティアセンター機能が必要なのか」ということなのですが、特に副題がついておりまして、今流行りの言葉なのですが、一国際的にも持続可能なコーディネーションシステムを築くために一ということで、お話をさせていただきましたと思います。

冒頭、私のほうから少しだけ今日の趣旨にまつわるお話をさせていただき、早速3人の方々の話を伺おうと思うのですが、私個人が今から2週間ほど前に、約1週間イギリスのロンドンに行きまして、日本の大学の研究者4人とNPOの関係者、日本とEUの関係者との国際的な会議が行われました。これは、政府間の会議でして、日本では内閣府、文部科学省、外務省、またお世話役の国際交流基金が参加しまして、そしてEUの関係者と、日本とEUとのあいだで話し合っていくというものなのですが、そのテーマが「青少年にまつわる問題」です。当然、日本とEUの諸国とは、青少年の社会的な背景そのものも違うわけなのですが、3つのテーマで話し合いが行われたわけです。

1つは、青少年に関して、皆さんご存じの「ニート」「フリーター」という問題。特に、ニートの問題に関しては、ヨーロッパでは経済先進国と言われておりますが、そういったニート、フリーターの若者達の雇用に関する問題。2つ目は、青少年の「非社会性」「社会

不適應」の問題です。対人コミュニケーション、また社会とのコミュニケーションというものが、不得手な若者達の問題です。3つ目は、「社会参加」ということで、青少年のボランティアも含めて文化的、道徳的、社会的、そして政治的な参加の芽をどうやって育てていけばいいのかということでも話し合いが行われました。

その中で、この3つのテーマで研究者同士の話し合いが行われましたが、共通していつも出てきた言葉が、実はボランティアというキーワードだったわけです。その中でも特に、高等教育の役割というものが大変重要で、日本とEUとの間で、これから積極的に具体的な取り組みというものを交流していこうというような緩やかな合意がなされて、この会議が終わったわけです。おそらく1カ月くらい後に、外務省などのホームページでそのことが発表されるのではないかと思います。いまや、大学等高等教育において、教育システムとしてのボランティアへの取り組みというものは、何も日本だけの問題ではなくて、実はヨーロッパ、アメリカ共通した課題でもあります。また、発展途上国においても、すでに1960年代から「スタディ・サービス」などの、大学がボランティアをとおした教育や、学生に対するボランティア活動支援に取り組んでいたわけです。

私は、かなり長い間欧米のボランティア教育などの調査研究をさせていただいております。今日は、国際基督教大学の山本先生が来られておりますが、アメリカの大学においては、「サービス・ラーニング」への取り組みは一般的になっております。大学というものが、ボランティア活動の持つ潜在的な教育力というものと、アカデミズム、すなはち教科を結び付けて新たな総合知というカリキュラムに高めていくことへの取り組みが行われている。教科学習において、学生自らが学習的な目的を設定した上で、ボランティア活動の持つ教育力を活用しながら地域社会や地球社会をフィールドにして学ぶ。そうした取り組みというものがアメリカで広がっているわけです。

日本でもご存じのように、大学において、ボランティア活動に関する何らかの情報提供や支援をしていく窓口を設置しているところというのは、80%を既に超えておりまして、さまざまな取り組みが行われております。しかし、一方でそういった環境ができつつあるとはいえ、大学の中にそういったボランティア・システムをきちんと位置付け、それを支援・サポートしていくような仕組みというものが出来上がっているかということになると、まだまだ発展途上の状況だと思えます。

今日は、シンポジストのみなさまと一緒に、大学にそうした機能や環境をつくり上げていくことについて話しあいたいと思います。また、私たちが大学教育において、学生のボランティア活動支援を行っていくうえでいろいろな困難な問題があるだろうと思います。今日は、短い時間ですが、私たちが大学により持続可能なボランティア・コーディネーションのシステムというものをつくるために問題提起をさせていただき、また午後には予定されている分科会での皆さまの話し合いの参考にしていただければと思います。ということで、今から3人の方々に取り組みなどのお話を伺いたいと思っております。

1つは、それぞれの大学がこのような学生のボランティアをサポートしていくコーディネ

ネーションの仕組みというものがつくられた背景。また、その仕組みや機能というものがどのような方法によって運営されているのか。そしてまた、コーディネーション・活動の具体的な内容。それらについて、15分ぐらいずつ各シンポジストの皆さんに発表していただき、また、それを基に深めていきたいと思います。

最初にお願いしておりますのは、広島大学からいらっしゃっております田中さんです。障害学生支援のためのボランティア活動室ということと、もちろん教鞭も執られておりますが、田中さんのほうにお願いをしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

田中 おはようございます。広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室の田中と言います。私は、2002年に広島大学のほうに移りまして、はじめのころから障害学生支援をしております。今回このお話をいただいて、自分でもあらためて広島大学の中のコーディネートの仕組みというのを、今日事例を含めてお話させていただきたいと思ひます。パワーポイントのほうを使ってお話をさせていただきます。



広島大学は、全学的に障害学生支援をしています。2002年になり、この障害学生支援をより実際に行うということで、専任教員を採用しました。それが私です。それから、コーディネーション機能ということで今日はお話をさせていただきますが、情報支援コーディネーターという、専任なのですが非常勤のコーディネーターがおります。それから平成16年に、特色GP（特色ある大学教育支援プログラム）に採択されましたので、それに伴い、ユニバーサルデザイン化推進の担当教員、それから専任の事務教員を加え、現在4名でボランティア活動室は活動しております。

まず背景ですが、たぶん、どこの大学でも状況は同じだと思います。広島大学も当初同じでした。これまでは、障害のある学生さんのためのボランティア活動というと、やはり同級生、それから熱心な教職員の方が、実際にボランティア活動でその学生を支援していききました。そして多くの場合は、やはり兼務で本来の業務をしていて、そのほかに兼務でコーディネートをしていました。実際に障害の学生が授業を受ける際に、先生方への連絡であるとかレジュメ・資料とかの準備の調整であるとか、それから定期試験の場合の調整もあります。場合によっては、授業の先生方と実際に障害のある学生さんがトラブルに陥った場合に、調停をするというような場合もございます。これが、できた背景は、平成12年に広島大学へ全盲の学生と高度難聴の学生が同時に入学したということがきっかけで、点訳資料が必要である、それからノートテイク、いわゆる先生のしゃべった言葉を筆談する、今日もお見掛けするところ、前列のほうでノートテイクをしているようなのですが、そういうノートテイクの派遣などをコーディネートするということで始まりました。その中で気が付いたのは、やはり兼任では難しいということです。それで学内にやはり支援

体制をつくり、専任でコーディネーターをする方が必要であるという現場からのニーズが出て、初めてコーディネーターを設置しよう、専任の教員を設置しようということになりました。

ざっとお話しします。教育改革というのは、平成 3 年に大学設置基準の大綱化というのが行われました。それ以降、各大学は自由裁量で、カリキュラムが編成できるようになりました。広島大学もこの平成 3 年以降、自由にカリキュラムを作るということで、特に教養教育科目についての改革が平成 9 年に行われました。以前から障害学生支援をしていましたが、その頃からやはり全学体制で行わなければならないと、教職員、それから実際の障害学生のほうからの声が出ました。それに伴い、平成 9 年に全学組織である障害学生就学支援部会、現在は障害学生就学支援委員会という名前の全学組織ができました。そのあと、組織ができただけでは実は機能をしないので、実際には全教職員に向けて、大学の規則ができました。これは今日たぶんお配りした『教職員のための障害学生就学支援の手引き』の後ろのページに規則等も載っておりますので、またあとでご覧ください。それから実際に、平成 12 年に先ほど申しました全盲の学生と高度難聴の学生が入学しましたので、そこから入学前からの一貫した支援を始めることとなりました。それに伴い、ボランティア活動室という私がいる支援活動の拠点を平成 12 年に立ち上げました。それから実際に今日、興相先生にもお話をいただきましたが、持続的な活動にしないといけないということで、ではボランティアの学生をどう集めようかということになりました。その当時、国立大学は、学生に対して謝金を支払うということが、かなり難しい状況でしたので、平成 13 年度に支援者育成のための授業をつくったらいいいのではないかと、そうすると授業をとってくれる学生を支援者にして、恒常的にボランティア学生を増やそうという考えを持ちました。それから 13 年にこの授業を開講することになりました。あとは特色 G P が採択されて、高等教育におけるユニバーサルデザイン化という障害学生を支援するだけではなく、実は周りの一般学生に対しても分かりやすい授業をすれば、障害学生に対応できるという考え方を採り入れました。障害学生就学支援に関する規則と、それから入学者選抜とか、相談の指針というのがあります。

そして全学体制ですが、これは部局長会議といって、学長、副学長などが参加する会議のもと、教育担当の副学長をトップとして、トップ・ダウンで実は組織ができています。先ほど言いました支援委員会は、副学長の直下にあるといえます。それから実際の実動である就学支援検討グループなのですが、これは実際には障害のある学生がいる所属学部の先生方が参加しています。現在、広島大学には 6 つの学部に障害のある学生さんがおりますが、その 6 つの学部の先生方を「支援委員」として、その支援委員の先生方が、参加し、企画立案をして支援活動をバックアップしています。それからその下に実際の実践であるボランティア活動室があり、一般の学生、そして障害学生が関わります。また、そのほかに学生スタッフとして、ティーチングアシスタントとか障害のある学生の所属学部にいる学生コーディネーターというのがあります。これは、障害のある学生とその所属学部の支援

委員の先生、あるいは授業担当の先生との仲介役・パイプ役を務めるものです。学生スタッフについては、有償のボランティアということで、謝金を支払っています。それから先ほど言いました授業の中で支援者を育成するということですので、授業の中では謝金は支払いませんので、単位を付与するというかたちをとっています。ここで見ていただくのは部局というのは、それぞれの所属学部になりますが、あくまでもその所属学部在籍している障害のある学生さんは、その学部で責任をもつということを明確にしています。入学前から一貫して支援をしています。試験前相談、合格後相談、それから入学後の授業支援というようなかたちで支援を行っています。

今日お配りした『障害学生就学支援の手引き』というのは、広島大学の全教職員に1冊ずつ配布していますが、約2,000部配りました。それから今日は、大学の事務担当の方が多いということで、そういう事務系の話もさせていただきますが、「障害学生が窓口に来た場合にどう対応しているのか分からない」ということをよく聞きます。そのために、窓口対応パンフというのを事務部門や保健管理センター、それから図書館に配布をし、簡単なレクチャーもさせていただきます。学生教職員一体型の授業支援ですので、啓発のビデオを作り、それから先生方が主体で講演会を開き、その当事者に語ってもらいました。ここでは文学部に実は車いすの学生が入学しましたので、どういう状況で困っているのか、どういう支援をしてほしいかという経験談を聞かせていただくということをやっています。実際に事例ですが、運動機能障害の学生については、例えば広島大学はキャンパスが広いので、とても移動が大変です。ですから本人と相談をして、電動の車いすを貸し出そうということをしました。これも上級生で新しい電動車いすを買ったから、これまで使っていた自分の電動車いすを新生に貸してあげてほしいということで、ボランティア活動室がコーディネートをして、貸出をしています。また、教室変更というのがあります。例えば、先ほどの文学部の学生は、文学部と教養教育を行っている総合科学部というところは、歩いて15分ぐらいあるのです。けっこう長い距離あります。車いすの移動もやはりそれに近い時間が掛かりますので、移動が困難です。次の授業に行くまでに時間が掛かってしまいます。そこで事務担当の方、特にカリキュラム担当の方とご相談をして、文学部で受ける科目なのですが、1年生のうちには教養科目が多いので総合科学部で受けます。ということで、文学部の科目も総合科学部で受けて、移動がないようにしようというコーディネートをさせていただきます。あとは、車での通学も許可しようということで、事務部門の方とお話をさせていただきます。

次に、トイレの改修とか、特別なトイレを用意しなくてはいけない場合は、今度はボランティア活動室から施設部の方へ依頼しました。大学には施設の改修工事を担当する方がいますが、そこと連絡を取って、トイレ改修についてコーディネートをしています。また、トイレだけではなく、専用の座いすも必要だという場合には、座いすを作っているとか、自助具製作の工房に連絡をして製作をしてもらおう。これも学部経由でコーディネートをさせていただきます。それから教室での改修、右側の写真を見ていただくと、作り付けの

いすではなくて、奥のほうにパイプいすがあります。これは、車いすの学生がここに置いて勉強できるように、それも友達と一緒に座ってできるようにということで、移動できるパイプいすを使っています。これも施設部の方と活動室でコーディネートをして、実際に実現したものです。これは保健管理センターです。実は人工呼吸器を使用している学生がいますので、トラブルがあった場合に、命にかかわりますので大変困ります。アンビューバックという一次的に人工呼吸器を代替措置する物を使って、安全面でも考えています。視覚障害の場合には、拡大読書器等を貸し出す。ただ、授業の先生方は、初めて見る機械なので、「これは何だ？何を持ってきたんだ？」というように思われてしまうので、授業担当の先生の同意・了承を得た上でやらなくてははいけません。そのためにボランティア活動室が、やはり授業担当の先生とも交渉をしてコーディネートをしていただいています。機器設置、あるいは機器の持ち込みについては、全て授業担当の先生とコーディネートをしなくてはいけないのですが、学部をまたがって、例えば教育学部の学生さんの授業に、こういう特別な機器を設置する場合には、総合科学部から教育学部に依頼を出して、そして教育学部から実際の授業担当の先生に依頼をするという組織立てが必要になります。このコーディネートをボランティア活動室でやっていますし、全学的な組織である障害学生就学支援委員会のほうで責任をもっているというようになります。

これも視覚障害の学生のために、手元でビデオが見えるように、出力を分岐してみえるようなかたちにはしています。もちろん、その場合には、左の写真のように、ここは一般の学生が座らないようにということで、貼り紙を大学の教務課のほうにさせていただきました。ここでもやはり教務課との連携が必要になっています。それから聴覚障害学生の場合には、ノートテイクの配置、それからビデオの文字おこし、字幕挿入とかで支援が必要になります。それから特に英語の授業では、リスニングがありますので、聴覚障害の学生の場合には困ってしまいます。1年次は、やはりその辺で難しいのですが、2年次以降になると、優先的に科目を選択するようになります。リスニングが難しいので、例えば作文を中心の授業にしてもらうとかということで、個々の授業担当の先生との交渉・コーディネートで、聴覚障害の学生が困らないようにしています。

ボランティア活動室は、日常の支援の拠点です。支援学生の育成を授業という場で行っていますし、学生の実習室でもあります。「障害者支援ボランティア概論」という授業と、実際に支援者育成、実際に障害学生の授業の支援をする学生は、「障害学生支援ボランティア実習」というのを履修していただきます。それでノートテイクであるとかビデオの文字おこし、それから全盲の学生の点訳であるとかということを授業の中でやっています。大体、年間100名ぐらいの履修登録数があります。授業は、実は後期で言うと12コマ開講しています。ここは、学生の都合に合わせていること、それから例えば聴覚障害の学生の授業にノートテイクを派遣しなくてはいけないので、そのノートテイク派遣と実習のボランティア学生が合う時間帯でコーディネートする必要がありますので、実は授業の場でもコーディネートをしています。このように教育研究の整備とか改善をしていきましたし、

障害学生支援委員会を設置しております。規則もつくりました。それから、やはり専任のコーディネーターが必要になっています。

広島大学の場合、全学的組織で、やはりニーズというのは障害学生が出しました。そのニーズを基に、それがボトムアップし、それから部局長会議（教育副学長）下にある障害学生就学支援委員会からトップ・ダウンで、実は支援活動が行われています。このようなかたちで先ほどもお見せしましたが、トップ・ダウンで実は支援活動システム化が図られました。繰り返しますが、平成12年の9月にこのボランティア活動室、当時は点訳室という名前で、ボランティア活動の拠点ができました。それから専任の支援者育成のための教員が採用されました。それから教職員、障害学生、それから支援学生をコーディネートするコーディネーターが設置されております。このコーディネートには、ボランティアのデータベースを実はつくって、データベース化されていますので、スムーズなコーディネートができるように現在しております。以上です。

興梠 どうもありがとうございました。具体的なケアを必要とする人々（学生達）を、いかにケアしていくかということから、全学的な取り組みへ発展していったといういろいろなお話をいただきました。どうもありがとうございました。

次は、国際基督教大学の山本さんにお話をいただくわけですが、日本でも皆さん、「サービス・ラーニング」という言葉はまだまだ耳に新しいのではないかと思います。昨今の文部科学省が大学におけるG P（グッド・プラクティス）において支援を行っていくときに、いろいろなかたちでこの言葉が登場するようになってまいりました。しかし、まだまだ大学における取り組みというのは、多い方ではないと思います。私もアメリカで調査したり、いろいろ資料を読んでいますと、アメリカでは、1960年代ぐらいから徐々にそういう取り組みが行われるようになったということです。そして、既に1985年には、ブラウン大学やジョージタウン大学、そしてスタンフォード大学の学長さん達を中心になって、全米の大学に呼びかけて学長自らが署名をして、2003年の段階では、全米で約950校以上の大学が、『キャンパスコンパクト』というような全米大学ネットワークを組織して参画しております。950以上の大学が「サービス・ラーニング」に関する取り組みしそのネットワークに加盟している。州でいうと、全米49州にわたってこうした取り組みが行われております。「サービス・ラーニング」これは山本さんにお話いただくわけですが、ボランティア活動の持つ潜在的な教育力というものと、アカデミックな教科というものを融合していく。その内容は、あらかじめ大学側が設定した教科科目とボランティア学習とを連動させた「サービス・ラーニング」の教育計画もあれば、むしろ学生自らが学習テーマを設定しボランティア学習をしながら学んでいくという方法もあります。そのように、多様なかたちで行われているわけです。

国際基督教大学では、全国の大学に先駆けて「サービス・ラーニングセンター」を設置し、全学的な取り組みを行っております。そういった先駆的な取り組みをされております山本さんにお話をいただきたいと思います。では、よろしくお願いたします。

山本 ありがとうございます。国際基督教大学の山本でございます。私どもの大学は、わりに小さい大学です。学部が 2,800 人ぐらいです。大学院を入れて 3,000 人ぐらいのわりに少人数の大学としてやっています。1つの大きな教養学部の中にいろいろな領域がある。どういう大学かによってボランティア活動を教科に結び付けるにもいろんなパターンがあるという意味で、ICU のバックグラウンドをまずご紹介を申し上げたいと思います。



私どもがこれまでどのようなことをやってきたかということが、お配りしました資料の 56 ページから書いてございます。今、ご説明のありましたアメリカのキャンパスコンパクトなど、サービス・ラーニングの発展の経緯についても書いてございますので、ご覧いただければご理解をいただけたと思います。64 ページ以降の資料などをご覧いただきながら、簡単にご説明したいと思います。

サービス・ラーニングというのは、簡単にいうとボランティア活動を勉強に結び付けるプログラムです。これをサービス活動と英語では言うわけで、サービス活動をやると通して学ぶ、あるいは学びながらサービスの中身を良くしていくことを重視した取り組みです。今、世界的にサービス・ラーニングという考えが非常にポピュラーになってきているという状況ですから、平たく言えばボランティア活動を、どのように大学教育のカリキュラムに取り込んでいくか、そういう努力が注目されているのだというふうにお考えをいただきたいと思います。

お配りした私の文章のサービス・ラーニングとは何かというところにも書いてありますし、センターのパンフレットにも書いてありますが、基本的にサービスをやる、あるいは奉仕活動をやるということから学ぶところはたくさんあるし、また、サービスをやることにより、学生達が得るものも大きいわけですが、それが大学の教科として意味があるには、学ぶ部分についてある程度しっかりした考え方がなければならぬわけです。私どもは、サービス・ラーニングをやることにより、単位を付与しますが、単位を付与する大学の教育プログラムであるからには、それなりの中身がなければならぬという考え方でプログラムの構築を図ってきたわけでございます。

サービス・ラーニングの概念（資料 64 ページ上）をご覧いただきますと、我々が今まで教室で学んだことを実際に体験してみるということは、それ自身役に立つことですから、非常に良いことではあります。やってみてうまくいかないことがたくさんあって、そのうまくいかないことから、実際現実の世界というのは、頭で考えるのとは違うということが、分かってきます。そこからその意味を内省する、英語でリフレクション（Reflection）という言葉を使うのですが、なぜうまく行かないのかを考えるプロセスが始まる。現実の中から学び取り、新たに知識に加えていくというその学びの過程を重視したプログラムなのです。ですから、サービスラーニングはリフレクションを行うことが、非常に大事であ

り、活動したことから学んで、そしてその人の将来のために、さらなるアクションにつなげていくのか、そのところをどのようにしてプログラムに組み込んでいくかということが、大事なプログラムであろうと考えています。ですから、やはり学生の側にやってみたいという気持ちとコミットメントがあるということが、まず初めにあり、それに対して私どもが、大学としてそれをできるように事前の準備をサポートし、実際に出て行く。出て行くけれども、ただそれだけでは終わらずに、実際の体験から何かを学び、将来の展望を持てるような取り組みみとしていきたい。カリキュラムに組み込まれるにはどうしたらいいかを考え、プログラムを実施する。私どもの場合は、合計 30 日分 240 時間は、やっってくださいと言っています。そういう状況です。

私どもは、割合に海外に関心のある学生が多いということもありまして、国際的な展開という側面を重視しています。しかし、キャンパスの中や周辺でも先ほど広島大学の発表にもございましたが、同じように、例えば盲人の学生をどうやって支援するかというのもひとつのサービスであると考えて、例えば点字訳のサービスをするとかいうプログラムもあれば、三鷹市のようなところで、夏休みにインターンシップをして、調査をやったりゴミ集めをやったりして、地域のコミュニティーに奉仕する活動も含まれています。また、海外に出掛けていって、海外国際協力の NGO 国境なき医師団、シャプラニール（民間海外協力団体 NGO）、ユニセフなどそういうところで体験をする。国際性を強調したプログラムも盛んです。最近はそのサービス先のネットワークが広がっています。

また本学の特色的な取り組みみとして資料に書いてありますように、サービス・ラーニングに関心のあるアジアの 10 ほどの大学と提携をして、そこに学生を派遣し、提携先の大学がコンタクトをもっている地域のサービス活動、例えばエイズ対策や孤児院などで奉仕をするようなプログラムを、タイ、インド、中国などで実施してきました。基本的な考え方は、ボランティア的な活動をどのようにして意義のあるように広げていくかというシステムづくりに取り組んでいるところでございます。いろいろとメニューがたくさんあって、ちょっと欲張ったプログラムなのです。もちろんこれらを、マネージするほうはなかなか大変でございますが、危機管理などに気をつかいながらやってきています。

大学と提携してやるプログラムは、提携している大学が、それなりの責任をもって学生をちゃんとしたところに配慮してくれたり、寮に入れてくれたりというようなことをやってくれますので、危機管理という点からも安心感があります。いろいろなメカニズムを併用しながら運営しているのが実情です。

資料の 3 に、今まで実施してきたプログラムを年表形式でまとめていますが、本学は、キリスト教主義、リベラル・アーツ、国際性を強調しているわけで、そういう意味からいえば、もともと良いことのために奉仕をしましようというのは、大学の教育の理念に結び付くわけです。96 年に私が国際関係学科の教授であったころの話ですが、国際インターンシップを始めまして、それに初めて単位を付与することを始めて、そしていろいろそういう分野のエキスパートである先生を客員教授で招聘（しょうへい）して、がんばってやっ

てきました。

そのような努力のなかでだんだん分かってきたことは、全学的に優先すべきプログラムであるということを大学として認めてもらう体制をつくるのが大切だということです。私は学長直結のプログラムという形で始めて、今はだいぶシステムが整ってきましたので、学務副学長がヘッドになって、そして2002年にサービス・ラーニングセンターというのをつくってもらい、そしていろいろやっています。今年、「そういう国際的な連携は良い」ということで、文部科学省のほうから「国際連携GP」を授与されました。それはそれで実は大変なことをごさいます、危機管理の問題もそうですし、どうやって先生達の協力を得るかということも1つの大きな課題であります。また、学生達がどのように協力してくれるかということも非常に大切なわけです。得てして、サービスが終わってしまうとおしまいみたいになってしまうのを、どうやってさらなる関心とアクションプランにつなげていくかというところを苦労しながらやってくるわけですね。その全体像について、いかに組織的なサポートをできるかということが大事だということです。それからなんといっても、サービスをやるのですから、受け入れてくれる機関、そことの関係というのは非常に大事で、長続きさせるには苦労が伴います。それなりに来てもらって良かったと、評価してもらえる関係を維持するには、やはり一丸となって、フォローしていく体制が必要だし、あるいはそのための準備が必要になってくると、思っています。私どもは、サービス・ラーニング関係科目一覧・資料4というのがありますが、サービス・ラーニングの入門のコース、実習準備のコース、実際に行ってやるコースがあって、実際に出かけるのは夏が中心ですが、実際に行ってやるのは、一応国内のコミュニティーというのと、国際と分けていますが、いずれにしても行ってやる。そして、帰ってきて、体験を共有し、評価し、さらなるアクションにつなげていく。そここのところを、なるべく説得しながらやっているのですが、それをいかにリフレクションのところにつなげていくかというところが、よいプログラムにするための課題である。そのためには、やはり多くの先生達に協力してもらわないと困るし、それぞれの分野に、例えば関連したプログラムを作ってもらえると良いと思っております。先ほど申し上げましたように、本学はわりに小さなリベラル・アーツの大学ですから、どの分野からも参加できるというシステムにしております。そろそろ時間ではないかと思しますので、その程度にさせていただいて、もう少し具体的には資料をお読みいただければと思います。ありがとうございました。

興梠 どうもありがとうございました。また、あとでいろいろお話いただきたいと思えます。それでは、今度は大変大きな規模の大学をご紹介します。中央大学総合政策学部から来ていただいております。中央大学総合政策学部は、さまざまな先駆的な取り組みをして大変注目されている大学なのです。特に今日は、経験学習プログラムという広い概念から、総合政策学部の取り組みをお話いただきたいと思えます。

具体的に実際に学生と接しながら、大学におけるコーディネーションの活動を行っている和栗さんです。では、よろしく願いいたします。

和栗 よろしくお願ひいたします。中央大学総合政策学部で特任講師をしております和栗百恵と申します。今日はよろしくお願ひいたします。今日、皆さんに私からお話することについて、自己紹介を兼ねて最初にお話いたします。

今、私の身分を「特任講師」と申し上げたのですが、これが先ほどから先生方のお話の中に出て来ている制度化なり、大学にどう制度化するかという部分で、人的配置という観点から1つキーになってくる部分かと思ひます。専任なのですが、契約期限付きというポジションです。1期2年、2期までというポジションにおひります。でも、プログラムをゼロからつくるような状態でおひりて



きて、この間、丸々3年間プログラムをつくらせています。2002年度より私が担当して来たのは、科目名で「国際インターンシップ」で、現在のカリキュラムでは「アクションラーニングプログラムス (Action Learning Programs)」と呼ばれているものです。あくまでも1科目1授業の担当の教員ということで、例えば広島大学さん、ICUさんと違うところは、ボランティアセンターなり、サービス・ラーニングセンターなり、そのセンター機能を請け負っているわけではなく、1科目を担当する教員として来ておひります。中央大学は、お恥づかしいことに、まだボランティアセンターを持っておらず、現在のところ学生部の中に1人職員の方がいらっして、その方がコーディネーションをなさっていらっしますが、まだ、きっちり制度化されているような状況ではありません。その方もまだ若い女性の方なのですが、なかなか制度化されない中で模索なさっている段階です。

今日、私がお話することは、あくまでも総合政策学部の中の実践についてなのですが、学部の中ではこれをボランティアと呼んでいません。非常に残念なことなのですが、ボランティアというと、それは小中高でやることだろうというような理解があると思ひます。それで、私どもの場合は、文科省の特色GPに選出された「アカデミックインターンシップの全学的展開」の中で、少しでも学生達がボランティアと呼ばれるもの、サービスというふうにはICUでは呼んでいますが、そういったことに触れられる機会をつくらうとして作ったプログラムです。ですから今日お話しすることは、持続可能なボランティアコーディネーションシステムについてのモデルケースではないかも知れません。そこをまず初めにお含み置きください。

そこで、お題をボランティアということで頂戴しておひりますので、ボランティアと私が担当するIIP (国際インターナショナルプログラム) /ALPs (アクションラーニングプログラムス=アルプス) についての話を少し差し上げます。いろいろ資料をみますと、ボランティアとは、学内外における社会体験・地域活動というふうには表されているらしいのですが、私たちの「IIP/ALPs」では、次の言葉を掲げておひります。それは、「Learning in Action, Learning for Action」ということなのですが、「日々の行動や思考の中で、さらなる行動のために学ぶ」ということです。かなり中立な言い方をしているの

すが、ここで学生達にしっかりと受け止めてほしいのは、関わる姿勢ということだと、私と一緒にプログラムをつくってきた教職員のチームは考えています。関わる姿勢というのは、先ほどの山本先生のお話だとコミットメントということだったり、やる気ということだと思います。臆病になっていたり、あとは、「しゃしゃる」という言葉をご存じでしょうか。学生の皆さんは、きっとお使いになっていると思うのですが、しゃしゃり出ることを、しゃしゃると言っ、学生達はリーダーシップやイニシアティブをとることを避けてしまう傾向があるような部分もあります。その中で関わることに臆病にならずに、関わっていいこうというようなことを受け止めて、それを身に付けていってほしいと考えています。もうひとつは、はっきりと言葉で使っているのが、スタディーサービスタワーというふうにしてスリランカに行くプログラムでは、サービスという言葉は私どもも使っているのですが、このサービスは、サーブする。つまり「仕えること、尽くすこと」ということ。また、それは一方的ではなく、現場に出て仕えていただく、尽くしていただくというような経験を彼らがしていく中で、それは一体どういうことなのか、と考えてもらう。そのあたりをブックにして、私たちのプログラムでは、ボランティアというものを捉えています。

次に、コーディネーションについて。コーディネーションは、つまり場づくり、側面支援のことだと思うのですが、これは私たちのプログラムでは、現場に出ることはもちろん、体験を一過性の刺激とすることなしに、どのように内在化するかの支援をします。最初海外なのですが、その現場が海外に出たあと、自分たちの日常生活に戻ってくるという環流があります。現場では教室で学んだことの検証、教室では学べないことへの「気づき」というものが起こっていくわけです。それを起こさなくてはいけない。そうすると、知識の意味付けが始まる。助けるということではなく、助け・助けられる。与え・与えられる。相互補完性というものがあるということに気付いていく。先ほども申し上げましたが、ボランティアと呼んでしまうと、それは学部のカリキュラムの中で単位を出すことではないと言われますので、知識の検証というフレームを使っています。

現場に出るための準備、ここはすごく大切なところなのですが、コミュニケーション能力や根性、段取り力、これを総括して人間力と呼んでいるのですが、これを単に現場に出たから現場の方にお任せするのではなく、普段の授業の中で、どのように学び取っていただくかというところを考えて、プログラムを運営しています。非常にガチンコ勝負で、大学で金八先生をやっているような気分にもなるのですが、そのようなかたちで促していています。

次に仕組みづくりの方法について、少しお話を差し上げます。仕組みらしきものが、あまりないのですが、プログラムがどのような経緯でできてきたかについて、紹介させていただきます。まず、もとは国際インターンシップという名前が始まったプログラムなのですが、それは当時の学部長のイニシアチブでした。先ほど広島大学の先生もおっしゃっていたのですが、トップ・ダウンのかたちでその仕組みがつくられるということで、それは科目だけだったのですが、その学部長が「やるぞ」と旗を振ってくださった。それで予算が確保

できた。予算を確保するとき、外部のある奨学金財団の理事長さんが、学部が出すならこちらからもマッチングでお金を出すと。そのようなことも学部長が動いてくださったから、可能となった。

次に同じように学部長が、「これをやるから専任が必要だ。特任契約付きということで専任の教員を配置しよう」と。今は多くの大学が契約期限付きのリクルートメントに変わってきていると思うのですが、そうして先ほど申し上げた1授業（科目）を担当するという位置付けの教員ということで、私が来ました。

また、ほかの教員の関わり、ここが非常に難しいところなのですが、あくまでも一授業とされているので、一授業について、何人かの先生方が関わるということは、あまり大学では見られず、元からチームティーチングになっている授業なら別ですが、そういうフレームがなかったので、ゲリラ的にワーキンググループをつくりました。親委員会は2個あります。1つは特色GPについての小委員会、その上に教務カリキュラム委員会、そして教授会といくのですが、その重層構造の仕組みがあります。実際、モラルサポートをしてくださる先生はいらっしゃるのですが、やはり、大学の中で行政など、すごく先生方も忙しいので、現場と一緒に行ってくださるとか、ふだんのところから学生を見てくださるというような関わりは、ワーキンググループレベル、私のほかに2人の若手教員——1人は同じく特任、もう1人は専任ですが、その人達にゲリラ的に関わっていただいています。

次に、今日の参加者の名簿を拝見させていただいたのですが、職員の皆さんがすごく多いですね。「職員の姿勢」と偉そうに書かせていただいたのですが、私は学部事務室の職員の方に助けられています。特に若手の方です。意思決定はできない若手の方で、でも学生がどのように毎日を過ごしているかをよく分かっている人たちが、業務枠を超えた部分で手伝ってくれている。つまり、今私がお話していることから皆さんお分かりかと思うのですが、きちんとした仕組みというものはあまりなく、どうしてもやはり、個人の思い入れや個人がどこまでやれるかという部分に、非常に安定していないところに立っています。言ってみればダイナミックな仕組みらしきものというものに支えられています。

あとは、先ほども少し触れたのですが、仕組みづくりに不可欠なのが、山本先生もおっしゃっていた学生のやる気、これは火を点ける工夫ということで、学生の皆さんは思いを持っていても、思いと行動がうまく合わないときに、どうやって行動を起こしていつてもらうか、もしくは興味のない学生さん達にどうやって火を点けて生き生きしていつてもらうか、そのあたりは後ほど紹介します私たちのプログラムのウェブ上に、全部シラバスなどの工夫が載っていますので、そちらでご覧いただければと思います。

そして、現場に出すための準備ということで、現場に出る前にビジネスレターやお礼状なりの感謝の言葉を伝えるとか、そのあたりの細かいところまでフィードバックと通して、ふだんから疑似体験のようなことをしてもらいます。そしてメールの書き方とかどういう言葉を使うか、朱入れと呼んでいるのですが、その朱入れをきちんとして、フィードバックするようにする。

最後に、先ほどの山本先生のお話にもあった現場からの理解とサポートということで、現場との関係を培うということ。すごく大事な部分なのですが、これがまた制度化されるとなかなか関係を培うという部分が難しかったりして、個人できちんとふだんからやりとりしているほうが、しっかりと関係ができて、やりとりもうまくいくというような矛盾もはらんでいるところです。

次に、IIP/ALPsの活動の内容ということですが、テーマとサイトということで、ここはざっと……。3つテーマがあります。開発、サステイナブル・リビング（持続可能な暮らし）、地域活動ということで、それぞれ場所がスリランカ、オーストラリア、米国です。スリランカでは、現地NGO、それから国際NGO、政府機関、国際機関、村の人々や町の人々に関わっていただく。オーストラリアのサステイナブル・リビングのコースでは、国連ハビダット賞受賞歴のあるエコビレッジに滞在して、またその周りにある地域生協組合とかそういったところの方々にもご協力いただきつつ、そこで活動をしていく。米国での地域活動をテーマにしたものは、ウィコンシン州マディソンというところで、NPOがたくさんあって、地域活動が盛んなところがサイトです。そこでのそれぞれNPO、大学、コミュニティーの人々に関わっていただき、実際にそこでボランティア活動を行うとなっています。

そして、どのようにアカデミックにするか、どのように授業としてOKに見せるか、かつ授業としてOKなものにするかというところについて。一年間のプログラムになっています。行って終わりではなく、まず事前学習ということで、2科目4単位、もしくは3科目6単位、卒業単位には換算されませんが、授業として、それだけ事前学習をしていきます。これが理論と事例研究です。それから現場経験が、約2週間2単位、3週間のときもあるのですが、これが2単位として換算。振り返り学習とさらなるアクションということで、また1科目2単位。これが事後学習ですが、全部通して一年間となっています。

資料の中、授業名が一番左側です。ALPs 1・2、それからフィールドスタディーズ、ALPs 3となっていて、例えば今年ですと前期（4月）にスタートすると、上記2つ（ALPs 1・2とフィールドスタディー）の授業をとります。それで夏休みが始まっても続いているのがこのALPs 2のほうで、夏休みの終わりぐらいにフィールドに2〜3週間行く。後期が始まると今度はまた2単位つけて、後期の終わりまでその授業が続くというかたちで一年のプログラムにしています。90分×15コマ、それが1科目の定義なのですが、それをきちんとこなして、ALPs 2の部分は、あくまでもその90分×15コマにプラスして出てきたもので、300分×5コマというのは、元々ないのですが、それだけやっってから現場に出るようにはしています。

先ほど申し上げた海外から日常への環流ということなのですが、どうしても海外の場合、海外に目が向いている学生さんたちは、最初のころ、日本で自分の身の回りのことというものが見えないのですが、実際に現場に行く、海外の現場に行くと鏡のような現象がおきまして、戻ってきたときに、自分たちがその場所で何ができるかという問いにぶち当たり

ます。またぶち当たってもらうようにそこは工夫するのですが、その中でさらなるアクションというものを生み出していくことが事後学習で求められます。これは、それぞれ私たちのところは仕組みがなくて、マッチングというようなかたちではなく、学生達がまず何をしたいか、そのときにどのような機会があるかというところで、毎回、毎回それを側面支援しながらつくっていきます。このスリランカのフェスティバルに関しては、去年1度やったのですが、ことし2度目ということで、まだ若いプログラムですから、もし私が、例えば10年とかそこで任期があるのだとすれば、10年の中にもう少しマッチングというかストリームラインするような、整理するような工夫はしたいなと個人的には考えているのですが、なかなか今のところだと、どうしても1回やって、2回やって、3回やれるかなぐらいのところまで止まっている状態です。

去年、実はスリランカのプログラムの前に津波が起きて、その時はスリランカに行く前に新潟の地震が起きたところに行って、雪下ろしの作業をするというようなことをしてから現場に行くなど、少しでも海外を海外として切り取られたものとして捉えないようなかたちでプログラムはつくっています。

最後に学生が書いてくれたことなのですが、コーディネーションと自発性について、1つだけ。コーディネートし過ぎると、自発性を損なう部分があり、いかに自発的なものの中で学生が何を感じてくれて、その生々しいものをどういうふうにコーディネーションで脇から支えられるかということが突き付けられているのではないかと感じます。これは3年生で、プログラムに参加したときに、2年生だった人です。「自分から興味と取っ組み合い、必死に勉強してどうしようもない壁にぶつかり葛藤する。そして、現場に赴き、村での労働やタミール人のコミュニティやエステートで体験したような頭だけでは理解できない心に直接突き刺さるような経験を積み、新たな学びのきっかけに出会う。これを繰り返すことにより、興味や責任イコール自分の一部になる。自分の一部として感じるができるからこそ、真摯（しんし）に取り組み、責任をもってそのために動くことができる。開発やスリランカのことをより多くの方に知ってもらい、それらの将来に何か影響を与えられるために、私たちが起こしたアクションは、一人一人が問題を自分のこととして認識し、責任をもって取り組もうという姿勢があったから実現したのだ」と。なぜこの言葉を皆さんにシェアしたかったかというところ、多くの学生は、ほとんどの時間を大学の授業の中で過ごしているのですが、大学の授業の中でボランティアなりサーブすることなりというものが、うまく具現化されていることが少なく、それらへの自発性を育む工夫がなされていることもあまりないのではないかと思います。特にこれは私、総合政策学部で、総合政策学部が政策立案者の育成ということを標ぼうするから申し上げるのですが、政策立案者になるのだとすれば、このようなことは、授業の中でもっと学んでいっていいのではないかと考えます。ボランティアといって、大学から切り離されたところで経験したとする。もちろん、能力のある学生は戻ってきて、日々の授業の中でつなげていくことができると思うのですが、もう少し大学のほうからそこを歩み寄って、間口を広げ、ふだんの授

業の中に日々の生活・学習との関連付けを「ボランティア」や「サーブする」を軸としてサポートすることが必要なのではないかなど。甘やかし過ぎだというふうに同僚に言われることもあるのですが、私はそのように考えています。

最後にこちらがウェブサイトになっておりますので、しばらく更新していませんが、もう少し材料がありますから、ぜひご覧ください。ありがとうございました。

興梠 どうもありがとうございました。私も学生に教えている身として、日々の生活学習との関連付けをどうするのだという、ドキッとするような問題提起を突き付けられたような気がします。

3人の方々にお話をいただいたのですが、限られた時間ですが、もう少し話を進めたいと思っております。今回のシンポジウムのサブタイトルは、「持続可能なコーディネーションシステムを築くために」となっているわけですが、これは日本の大学の現状からするとかなり厳しいサブテーマではないかと思えます。やはり、学生へのボランティア支援は、持続的・継続的に取り組んでいくような仕組みづくりというものを大学の中でしていかなければならないという課題がありまして、こういうサブタイトルになっているわけです。

では、この持続的なシステムをつくっていくために、大学にどのような条件、それからサポートをしていく環境というものを作りあげていけばいいのかということについて、3人の方々にご提言をいただきたいと思えます。おそらく、それぞれの大学でのお立場がありますので、言える範囲（笑）ということにしないとイケないのかなと思うのです。そこで、会場にいらっしゃいます皆さんに対して「こういったことを試みると、もっとうまくサポート環境というものがつくってイケるよ」といったようなことをお話いただきたいと思えます。打ち合わせでは、それぞれ5分と言っていたのですが、時間があまりなくて申し訳ありません。それぞれ3分以内ぐらいで和栗さん、山本さん、そして田中さんに今度は逆にお伺いをしたいと思うのですが、お話ししたばかりで申し訳ないのですが、和栗さんいかがでしょうか。

和栗 はい。再び和栗です。プレゼンテーションの中でもある程度こういうことが必要だということを申し上げましたので、私のほうからは手短にお話差し上げたいと思えます。今、こちらで「条件とサポート環境」というお題をいただいたのですが、条件としては、やはりトップ・ダウンである程度物事を進める必要があると感じます。上のほうの方、学部長なり学長なりが旗を振る。そしてそこに向かってみんなで走るぞというような条件が出来上がることが必要だと思います。下のほうからゲリラ的にやっていってもなかなか…それは大切で、そこも同時に育まなくてはいけない。でも、まずトップ・ダウンかつキーになる方々が何人かいること、そのキーになる方々と志をシェアできるような、「こんなこともできるじゃないか」とシェアできるような関係をふだんからつくるようなことが必要ではないかと思えます。もうひとつは連携に関して。今日は国際ということで、少しスリランカとかオーストラリアとかお話ししたのですが、先ほど実は興梠先生ともお話をして

いて、例えばボランティアセンターというと、きっと皆さん「地域との」ということをお考えになっているかと思うのですが、その地域とつながるために、キーになるようなその地域の団体、地域のボランティアセンターなり、区の〇〇センター、そういうところとの連携ですね。そのときに、たぶんそういったところは今似たようなリクエストをたくさん得ていると思いますので、どなたか大学の中でこれを担当する方が必要だと考えます。何人か中心になる方々で燃えるようなミッションをまず共有して、それをもって外部の担当者の方にお話に行かれることが必要かなと思います。あとはもう、これはどうしようもないというふうにお考えになるかもしれないのですが、教員や職員が、なぜ大学で教えているか、働いているかというところを問えるような場所、ふだんなかなかないと思います、忙しくて。でも、そういう対話なり小話なりというものが、少しでもできるような環境を。愚痴だけでなく、こういうふうになるといいね、こういうふうにやろうというような話をご自身と周りから始めることができればなど、すごく難しいことですが。大きい大学ですので、あまり制度のことは私のほうからは申し上げるとそこもまた……（笑）。まずは、個人として私がこんなことができるのではないかなと考え、それを共有していく。そのあたりかなと思っております。あまりご参考にならないかもしれませんが……（笑）。

興梠 ありがとうございます。かなりの的を突いた意見だと思います。（笑）それでは、山本さんはいかがでしょうか。

山本 基本的には今、和栗さんが言われたことに賛成です。やはり組織として取り組むぞという意志をどういうふうにして説得し、そのためのアクションをインスティテューション（Institution）としてやるようにするかがカギです。私はどうしてサービス・ラーニングをやっているかという、やった学生たちが、なんとも元気になるからのです。目が輝くし、次にいろいろ言われなくても卒論の課題は、そのやったことに関連したこと、あるいは将来の選択が非常にそれに関連したことになってくるという、その現実をやはりみんなに知ってもらうことが大切です。和栗さんとはいろいろなところでお会いしますが、中央大学の和栗さんのところの学生からもその影響の大きさを感じるのです。サービス活動をやった学生たちがいかに大きな影響を受け変わるかということを示しながら、皆のサポートを得るといふ、そこが大切だということに尽きるのではないかな。そういうことをすることにより、今まで関心のなかった先生やスタッフも関心をもってくれるようになり、前向きな反応が出てきます。そのループをどのようにつくっていくかということで、やっている人たちは、チームを組んで、要するに何時間労働とは言わずに取り組まないといけないというところはありますけれども（笑）、それがうまくいくとだんだん理解の輪が広がっていく。広島大学も私どものところも和栗さんのところもそれなりのGPのようなものを貫っている。そうすると、それはある意味で、「またやらなきゃならん」と言ったらなんです（笑）、1つのやる気が出てくるし、例えばこういう機会がどんどん出てくる。文部科学省も含めて、いろいろなこういうフォーラムができてきました。こういうような話になると、「うちもやんなきゃだめだ」という感じになってきます。その基は何かという

と、やはり学生はこんなに元気づく奉仕の体験をすることによって、学生のニーズに応えているのだということ。それを要するに周りに示すという、これがサステイニングビリティーの基本ではないかと思います。それぞれの大学の環境は全然違いますから、それぞれに合うやり方をやる必要が、しかし基本は、良い例を示すということではないかと思います。

興梠 ありがとうございます。田中さんにお伺いするわけですが、おそらくどこの大学でもさまざまなケアを必要とする学生たちがいると思います。つまり、多様なハンディをもつ学生達を、どのようにケアをしていけばいいのかというのは問題を抱えているのだろうというように思います。社会全体がノーマライゼーションへの取り組みをするとともに、さらには、「ソーシャルインクルージョン」に基づく誰も排除しない社会を築くということが大切になってきた。当然大学でもそういった社会に対応し、ハンディをもつ学生のための学習環境を整えていかなければいけないわけです。しかし、現実のところからしますと、なかなか環境づくりは難しい。それにはどういうノウハウで環境づくりに対応すればいいのか、予算をどうするのかというようなことがあると思いますが、そういう面では広島大学は、かなり先駆的な勇氣ある取り組みをしているというふうに思います。皆さんが抱えている問題ということも含めて、田中さんに少しまたご助言をお願いしたいと思います。

田中 はい。今日の午前中の最初に文部科学省の方に「国立大学でのボランティア活動はまだまだである」というようなお話をいただき、すごく「なにくそ」という気持ちになりました。あとは、山本先生のお話から、やはり「やらなきゃいかん」というような姿勢をもつこと、学生だけではなく教職員がやはりもつことが必要なわけです。広島大学は全学体制になっていて、ボランティア活動室という名前にしています。ボランティアセンターではないのです。実質はボランティアセンターの機能をもっているのですが、センターという名前を付けていません。今日パワーポイントやお手元の別紙の資料でも組織図がありますが、私が言いたいことは、障害のある学生が所属している学部が責任を持つということで、ボランティアセンターにしてしまうと、ついそこに頼りがちになってしまい支援を怠ってしまう可能性があります。支援を行うのは、その学生の周りにいる同級生であり、教職員であるということが一番なので、そこをまず「やらなきゃいかんと思わせる」ということです。また、周りがワアワア言っているだけでは困ってしまうので、やはり障害学生自身（ニーズの発端）が、そのニーズをきちんと把握し、明確であるということが重要ではないかと思います。これもやはり、教職員が大学のトップレベルのところへ訴えていくには必要な条件であると思います。

それから、広島大学ほかいろいろな大学で、やはり障害学生支援室であるとか、ボランティアセンターであるとか、いろんな学生を支援する部署があります。そういうところで働いている方は、やはり兼務ではなくて、専任でコーディネートをしていくこと、兼務ではやはり難しいことが多いです。かなり多岐にわたっています。広島大学でも、施設部であったり、教務の関連であったり、授業の担当の先生であったり、授業関係のカリキュラ

ムの部門であったり、いろんなどころと連携をしないといけない。それにはやはり一人の力だけではできませんので、連携をして協力するためには、それをコーディネートする人が、やはり専任が必要です。それをやはり強く言いたいと思います。それから先ほど和栗先生のほうにもキーマンが、やはり要るということがあります。これは、副学長や学部長であり、「旗振り役」と言っておられました。そういう人は、やはり必要だと思います。

それから予算措置、これが一番重要なのです。何もないところからボランティア活動というのはできてくる。ただ、それにもやはり限界があります。予算的な措置を付けないと、今日のサブテーマである「持続的なコーディネーションシステム」は継続していきません。ですので、やはり予算措置が重要で、広島大学の場合を少しお話させていただくと、部局長会議、副学長の下に、「障害学生就学支援委員会」があります。これは、先ほども言ったように、各学部の先生方が参加をしています。

ちょっと言い忘れたことがあって、実は教務担当の職員の方もこの委員会に入っています。ですから、先生方だけの組織ではなく、実は教職員の組織なのです。教職員の組織ですので、スムーズな動き、それから各学部から出ているというのが、やはりもうひとつキーになります。今現在、障害のある学生がいない学部の先生方も参加していただいて、いざ入学した場合にどう対応していいかというのを、やはり難しい、とまどってしまうということがあるので、現状はいなくても参加してもらおうということで、意識を高めてもらう。それからそういう意識を持ってもらうことで、どこに入ってもその学生が困らないようにするには、やはり全学組織や全学的な予算措置が必要であると訴えていかないと、やはり難しいといえます。広島大学はその方法で、全学予算で認めていただいております。

興梠 どうもありがとうございました。時間が来てしまいましたが、もう一言ずつお願いをしているのですが、おそらく今日来られている皆さんの中には、たまたまボランティアなどの支援に取り組んでいくたまたま担当になり、これからどのように1からつくりあげていこうかという大学や関係者の方々もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。これからシステムづくりに



取り組んでいこうという方に、ワンポイントアドバイスというのをお願いしているのですが（笑）、でもこんないい加減な質問に答えられるかどうか分からないのですが、既に具体的に踏み込んでいらっしゃるシンポジストの方々一言ずつお伺いをして、あとはまた後ほどつかまえていろいろお話をいただくということで締めたいと思います。すみません。お話かなりしていただいたのですが、田中さんのほうからワンポイントアドバイスを（笑）。

田中 ワンポイントですが、ツーポイントぐらいかもしれないですけど、平成15年度から実は大学教職員向けにやはりレクチャーをしています。まず大学職員の方に対しては、新人研修で必ずボランティア活動室に来ていただき、障害学生の対応についてお話をさせていただいています。それから年度末にチューター勉強会というのがあって、その学生の指

導教員や、そういう主となる先生方に集まっていただいて、やはりそこでも障害学生の対応であるとかというお話をさせていただいているのが全学的な意識の向上や意識改革につながっているのではないかと思います。以上です。

興梠 ありがとうございます。それでは山本さん、お願いします。

山本 繰り返しになるのですが、やっぱりボランティア活動というのは、何のためにやっているのかということが大切です。基本的には何か大事なことからやっているわけです。障害者を助ける、あるいは途上国の貧しさのために何かできないかとか、海外だったらそういうことになるかもしれない。そういう社会的に意義のあることを学生達が実際に体験をして学ぶということが、いかに教育にとって大事か、いかに大学にとって大事かということを、実例をもって周りに示していくということが、周りのサポートを得る上でも非常に大切であると思います。特に教員でそういう意識のある人がいると、学生たちへの影響力が大きいですが、大学職員の方がそういう意識で学生に接したり、大学当局に働きかけて学生が変化する様をみんなの目に触れさせるようにするということが、非常に抽象的な言い方ですが、プログラムの成長にとっても大事なことで、私は思います。

興梠 ありがとうございます。それでは和栗さん、お願いいたします。

和栗 はい。もう個人的な励ましのような言葉にしかないのですが、つい最近ですか、流行った歌の一節に『地に足つけ 頭雲ぬけ 進む前に前に……』というラインがあります。私もこのプログラムをゼロから周りの職員の方、それから教員の方に支えられてつくってくるときに、「前に進むとき、一歩出なかつたら半歩ね」ということで、とにかく既成事実をつくりだそうとしました。制度化にあたって最初なかなか辛くても、その歩みを止めずにぜひがんばってほしい。そしてその時に、学生の方がたくさんいらっしゃるのでも、学生の方ができることというのはすごく大きいと思うのです。大学というのは、やはり学生のニーズに応じていかなくては、今後特に厳しいと思うので、そこを経験して、その素晴らしさを知っていて、その効果を知っている学生の皆さんが、声をあげていく、学生が動いていくというあたりを大学側からもエンカレッジしつつ、学生の皆さん側からも大学に働きかけていくというようなことが必要なのではないかと思います。

興梠 どうもありがとうございました。この「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」は、年を重ねる毎にいろいろなテーマで話し合いをしてきたわけですが、何度かご参加の方はお気付きかもしれませんが、この集いでは学生自身が協議をしていくというような分科会が誕生して、より活発な議論が行われるようになってきました。

私は先週、愛媛に行きました。愛媛大学には「ボランティアセンター」が設置されていて、全国の大学の関係者に呼びかけシンポジウムが行われました。そこに出席させていただいたのですが、愛媛大学は、先ほど「国立大学はまだ……」とおっしゃったのですが、私は行ってみてちょっと驚いたのです。愛媛大学の「ボランティアセンター」を見て、これは国立大学なのかと思うくらい、明るくてオープンなすばらしいセンターでした。キャッチフレーズが「学生による学生のためのボランティアセンター」ということで、積極的

に学生達が参加し、プログラムづくりから運営までかかわっているということでした。そして、現場の教員の方と職員の方が、徹夜で「ボランティアセンター」の明るいインテリア・デザインを考え出した。そこにはパソコンが数台ならんでいる。しかも、ピアカウンセリングの部屋も隣接している。そこに、シンポジストとして、立命館大学のボランティアコーディネーターや学生が参加しておりました。この大学も学生が運営に参加しているボランティアセンターで、しかも瀬戸内海を越えて、国立私立を越えた相互の大学間の学生同士のつながりや取り組みなども行われているというような話を伺ったわけです。

会場には、シンポジウムに登場していないのですが、大勢の学生をはじめ、数は少ないのですが地域の側から大学をサポートしていこうという中間支援機関であるボランティアセンターやNPOセンターなどの関係の方たちも来ていらっしゃいます。

私は、このフォーラムについて、ひとつの夢があるのです。それはどういうものかと言いますと、いつかこのフォーラムのシンポジウムが、まず学生当事者がシンポジストになり、大学の経営者もシンポジストになり、現場の先生もシンポジストになり、地域の側で支援していくような関係機関の人もシンポジストになって、この場で多様な議論ができるような時代が来ると本当にいいなと思っております。そういった時代は、もうすぐそこまで来ているような感じもします。

その夢を語りながら、本日のシンポジウムを締めさせていただきます。3人のシンポジストの皆さんに、あらためて深く感謝を申し上げます。また、皆さまにおかれましては、これからの討議の際に活かしていただき、さらに交流を深めていただければ幸いに思います。どうも皆さん、ありがとうございました。(拍手)



第2部 分科会

第1分科会

「学生部職員のためのボランティア入門」

<コーディネーター>

興 梶 寛氏（社会福祉法人世田谷ボランティア協会理事長）



＜第1分科会＞

「学生部職員のためのボランティア入門」

ボランティア活動を構造的に捉えるならば、「自己実現」と「社会実現」との2つの性質によって成立しているのではないかと思う。

大学において、学生のためのボランティア支援に取り組むためには、教職員はその2つの側面について理解を深めていく必要がある。つまり、1つは、学生がボランティア活動をとおして自己の成長をはかるために支援する側面である。また、2つは、学生がボランティア活動をとおして社会に参画するために支援する側面である。

また、あえてボランティア活動のもつ潜在的な教育力とは、①自己を見つめつつ価値意識を育て、自己の可能性を信じて、自らのよりよい生き方を探りつづけていく力「自己実現力」。②他者に関心を持ち、よく知り、よりよい関係をつくりながら、他者と共に生きる環境を創り出すことのできる力「社会力」。③学ぶことの意味を知り、目標をもって持続的にそれを探求し、学習成果を自分のものにしていくことのできる力「学習力」。④社会を構成する人間としての自覚と責任意識を育み、家族や近隣社会をはじめ、自治コミュニティや国家、さらには地球市民として、共生の時代を切り拓いていくことのできる力「市民力」と、表現することができるだろう。

分科会では、学生がボランティア活動をとおして自己や社会と出会い、さらには、学生が学びの世界をより深め広げるために、大学に何が出来るかを探ることにした。

分科会は、入門編として、コーディネーターによる講義とワークショップ形式で、参加者の積極的な意見交換をもとに、大学におけるボランティア支援システムの在り方について活発な議論を行うことができた。

(報告者：興梠 寛)

第2分科会

「ボランティアセンターのつくりかた」

<コーディネーター>

小拔 隆氏（東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター）

<事例発表者>

郡司 京子氏（国際医療福祉大学）

岩永 秀徳氏（国際基督教大学 総務理事）



第 2 分科会「ボランティアセンターのつくりかた」

コーディネーターまとめ

小抜 隆（東北福祉大学ボランティアセンター）

第 2 分科会では「事例発表」、「グループ討議」、「グループ討議の発表」の流れで会を進めました。

事例発表では、IUHW ボランティアセンターの郡司京子さん、長崎県社会福祉協議会の岩永秀徳さんより日頃の取組や課題、地域との連携についてお話をいただきました。

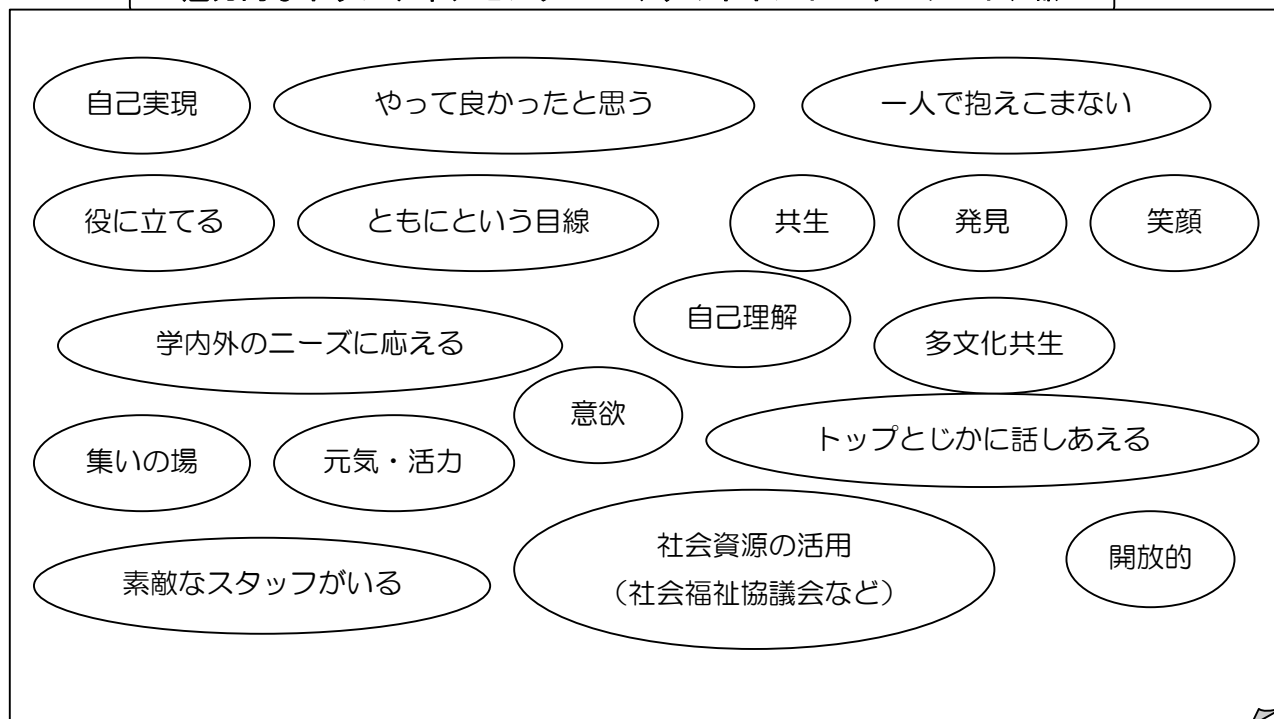
グループ討議では、6 グループに分かれ「魅力的なボランティアセンターをつくる」をテーマとし、自由に意見・アイデアを出していただき、話し合いの成果を模造紙にまとめました。

グループ討議の発表では、それぞれの班ごとにセンターの「目的・めざすもの」、「具体的な取組」、「組織・運営」、「特徴」、「魅力的なボランティアセンターづくりのポイント・キーワード」について発表していただき、それらをもとに意見・情報を交換しました。

グループごとに学生がメンバーとして入っていたこともあり、普段はなかなか聞くことができない「生の声」を聞くよい機会になったようでした。

班ごとに出された、魅力的なボランティアセンターづくりのポイント・キーワードの一部をご紹介します。

魅力的なボランティアセンターづくりのポイント・キーワード(一部)



第3分科会

「実践的ボランティアコーディネーション術」

<コーディネーター>

村田 素子氏（聖心女子大学学生部マグダレナ・ソフィアセンター）

<事例発表者>

高橋 邦夫氏（木更津工業高等専門学校）

諏訪田克彦氏（神戸親和女子大学）

桐澤 夏樹氏（立命館大学ボランティアセンター学生スタッフ）



第三分科会には大学スタッフ、教員（大学、工業高等専門学校）、学生、地域のボランティアセンタースタッフ、合わせて 30 名が当日参加しました。その多くが日々、試行錯誤しながら学生ボランティア活動の支援をされている方々でしたので、情報だけでなく悩みも疑問も共有しそのなかでつながることを感じてもらうことに 3 時間半を費やしました。

事例発表には工業高等専門学校、大学、学生の立場から話をしてもらいました。そのあとのグループワークでは教員、職員、学生を交えたグループを 5 つ作り、各自が抱える課題をグループ内で共有してもらいました。最後にボランティアコーディネーターを行ううえでキーとなるポイントをグループごとに発表してもらい、更に全体でそのキーに伴う課題、問題点を共有しました。

以下がグループワーク、全体シェアリングからでてきたものです。

ボランティアコーディネーターをする上でのキー

グループ 1：ネットワーク、地域との関わり方

グループ 2：つながり、ニーズの把握、活動をする上での仕組みづくり、

「ボランティア」という概念の再確認

グループ 3：ボランティアする側・される側、情報提供する側・される側の温度差、

事前研修、情報源の信用度、リクルートの仕方、有償・無償・費用弁償等
金銭に関わる問題

グループ 4：（活動に）一歩踏み出すための後押し、専門知識、社協とのつながり

グループ 5：安全性の確保、ヨコのつながり、地域とのつながり

ポイントはネットワーク、つながり

フラットな関係であるボランティア活動で大事なものはネットワーク、ヨコのつながりです。ボランティアする側・される側、情報提供する側・される側、これらもヨコにつながった関係にあります。このつながりは大学内だけでとどまっているものではありません。社協や NPO・NGO、その他様々な団体とつながっていく必要があります。

他部署とは違った組織形態をもつ大学ボランティアセンター

学内の組織体系（ピラミッド型）に組みしながらも外とネットワークをもつ大学ボランティアセンターは、既存の部署とは異なった性格（ネットワーク型）をもっています。その性格をボランティアコーディネーターをはじめ、その他大学関係者は理解しておく必要があります。両タイプの長所を生かしたとき、センターはより効率的に機能するでしょう。

第4分科会

「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」

<コーディネーター>

栗田 充治氏（亜細亜大学国際関係学部教授）

<事例発表者>

藤田 久美氏（山口県立大学）

今道 貞一氏（成蹊大学）



2005.12.08 学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い

第4分科会のまとめ

コーディネーター 栗田充治（亜細亜大学）

第4分科会「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」

大学における学生ボランティアの状況に変化がある。文科省の補助金政策により、地域貢献と連携した大学開放の取り組みやボランティア体験活動の導入がこれまでになく積極的に展開されている。ボランティア関連授業の開設も300校に近づいている。大学内のボランティアセンター機能を持つ組織もすでに50校を超えた。大学内にボランティアセンター機能を持つ組織を作ることは大学の教育・研究活動と切り離せない。その意味でサービスラーニング的な取り組みが今後ますます試みられると予想される。地域の側も、次世代の若者に地域の課題を理解してもらい、共に取り組むことで地域を活性化できる絶好の機会と捉えている。現在は、こうした動きにきちんと対応できる大学と、対応できない大学の二極に分解しつつあるのではないか。ボランティア活動の持つ教育力を大学関係者が積極的に理解する必要がある。

以上の問題意識で、第4分科会の運営を行った。

先ず、参加者の中から、藤田久美氏（山口県立大学社会福祉学部）と今道貞一氏（成蹊大学学生部）のお二人に事例発表をお願いした。

藤田氏は社会福祉系の学生がボランティア関連サークルに属している学生以外は、普段あまりボランティアに関わっていないことを知り、教育プログラムへのボランティア教育の導入を始めた。1年生向けの教養科目「ボランティア」（2003開設）、2年生向けの「プログラム企画演習」、3年生向けの専門科目「福祉ボランティア論」という順を追って、体験が深まるよう指導している試みが報告された。また、この中で、学生の提案から学生主体のボランティアセンター的組織「学生プチボランティアセンター」の設立とその活動の一端が紹介された。

今道氏は2002年に行った学生実態調査から、ボランティアをしたことのある学生が14%程度なのに、機会があればやりたいという学生が80%に達していることに注目し、学生部職員として学生がボランティアへのきっかけをつかめる対策を講じてきた。情報提供やボランティア入門講座の開催、ボランティア体験報告会の開催を通じて、大学内にボランティアセンターを作ろうという動きを作り出しつつある状況が報告された。同氏も大学のある地域のボランティアセンター運営委員になるなか、2004年度から文学部にボランティア関連科目が開設され、2005年、学生部長のもとに「ボランティア推進委員会」が組織された。

その後、6グループに分かれて、「知りたいこと、疑問・課題点」を挙げて、その対策をグループの知恵を絞って考える作業に移った。約50分の作業後、模造紙にまとめてもらった内容を代表者が発表した。

多方面の課題が出されたが、共通した点の一つは、「ボランティアを進めるに当たっての大学の壁」の存在である。お金がない、もの（施設・機材・部屋・電話）がない、しくみがない（学生の自主的活動への制約）、関心と理解がない（窓口の対応、教員の対応）、人（キーパーソンとなる教職員・学生）がないという5つの壁である。

キーパーソンは待っていても現れない。先ず個々に参加した我々がイニシアティブを取らねば何も変わらない。ボランティア新企画を助成金付きで募集した国士舘大学のような、何らかの仕掛けを導入する案もある。ちょっとした自主的活動の成果をマスコミに流し、学外で評価してもらうことで学内の関心と理解を刺激する手もある。ボランティアセンターを持つ大学と地域的な連携を取ることで学生・教職員にモデルを示す手もある。地域貢献を重視するようになった現在、地域のボランティアセンターやボランティア・市民活動団体などに大学へ協働を働きかけてもらう迂回作戦もある。

2つ目は、学生のボランティアは、地域に役立つことをめざすのか、それとも学生の学びを優先していいのか、という疑問である。受け入れ先に迷惑をかけて、大学に苦情が来る場合もたしかにある。事前学習を徹底する課題だが、それでも万全ではない。サービスラーニングのレベルなら、それなりの知識と技能を持って出かけることが前提となる。しかし、コーディネータの見解は、学生の場合は学び優先でいいと思う。若い世代を育てるという教育的意義を受け入れ先にも共有してもらいたいと思う、逆に言えば、そうした教育堤配慮を欠く活動先は避けた方が賢明である。そうしたところは、学生を「タダの労働力」としてしか期待していないところが多いからだ。

3つ目は、ボランティア授業そのものへの疑問にどう答えるか、という課題である。ボランティアの単位化についての根強い疑念が大学関係者の中にある。専門として確立されているのか、評価の基準はあるのか、という疑問もある。コーディネータの見解は、ボランティアについて学ぶならば、あるいは、ボランティア体験活動を用いて学ぶならば、その学びの成果に対して単位与えることは可能だと思う。したがって、評価の対象はボランティア活動そのものではなくて、それを媒介にして進められる学びの内実である。また、明確に言えば、授業で課されるボランティア体験活動は、本来の自主的なボランティア活動ではなく、教育という制度的枠組みの中で課される「コミュニティ・サービス」である。その違いをわきまえておく必要がある。したがって、ボランティア体験活動を必修にする場合は、学生の自主性に対する最大限の配慮が求められる。また、評価の軸は、教師の評価や相互評価、受け入れ作の評価などを参照させた上での自己評価である必要がある。

最後に、分科会には学生諸君が数名参加してくれ、学生の視点で大学当局の課題を指摘してくれた。その中のある学生が、学長に改善提案書を出したという話には、参加者から激励の暖かい拍手が送られ一幕もあり、和やかな名刺交換、感想交換の内に終了した。

第5分科会

「学生が結ぶボランティアネットワーク」

<コーディネーター>

今井 治氏 (S v n e t事務局コーディネーター)



平成17年度学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い

第5分科会 学生が結ぶボランティアネットワーク

コーディネーターのまとめ

今井治 (SVnet 事務局コーディネーター)

第5分科会では、参加者が学生主体の分科会ということもあり、ボランティア活動を行って行く上での悩みや工夫、ぶつかっている壁や将来の展望について、学生の目線で語り合い、また、大学間のネットワークづくりの“きっかけ”となるような意見交換・協働を視点にいたしたワークショップも行いました。それらを通じて、「学生ボランティアの活動実態」や「活動を生かして何ができるか」について活発な意見が交わされました。

<当日出された主な意見・見解など>

学生ボランティア活動の支援について

ボランティア情報の充足については、インターネットや広報紙・メールマガジン等を通じて、学内外において、必要とする情報は、ある程度得られている状況であると言える。しかし、逆に情報がありすぎることにより、その中から自分が必要としている情報を選び取ることが難しく、活動に一步踏み出せない状況もある。

ボランティア活動を行うための支援について、情報整備や参加の一步となる仕掛け（講座・セミナー）の充実、活動中や前後のサポート・フォロー体制が望まれるが、中でも特に、ボランティアサークルやグループで活動している学生は、メンバー確保や安定した運営体制を確立していくために、大学の施設等の資源をもっと積極的に提供・利用できることを期待している。

学生がボランティア活動を行う意義について

学生はいわゆる『社会貢献』を目的としてボランティア活動を行うのではなく、『新しい発見や学び・様々な出会いや体験』を目的として活動をしている、または参加の動機として始める学生が多くいると思われる。

ボランティア活動をすることにより、個人それぞれボランティア活動を通じて自分の変わった点について違いはあるものの、理論と知識のみで捉えるのではなく実践から多くのものを学び、社会問題に対する意識を高めている。

など多数

最後に、今回、各地から多くの熱心な学生が参加しており、「ボランティアとは何か」「ボランティア活動をする意義は何か」など、ボランティアに対する見方・考え方にも多様性が見られました。これも活動に参加したからこそ理解できる変化といえるかもしれません。是非これからも学内外問わずボランティアリーダーとしての活躍を期待したいです。

平成17年度学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い アンケート集計結果 総括表

- 平成17年12月8日(木) 開催 (東京国際交流館 プラザ平成)
- 参加者人数 201名
- 回答者数 172名
- 回収率 85.6%

※結果数値(%)表章単位未満を四捨五入してあるため、内訳の合計が計に一致しないことがある

質 問 事 項		回 答	件 数	割 合
回答者の内訳	* 性別	①男	92	53.5 %
		②女	69	40.1 %
		不明	11	6.4 %
		計	172	100.0 %
	A 年齢別	①10・20歳代	67	39.0 %
		②30歳代	38	22.1 %
		③40歳代	34	19.8 %
		④50歳代	17	9.9 %
		⑤60歳代	10	5.8 %
		⑥70歳代以上	0	0.0 %
		未記入	6	3.5 %
	計	172	100.0 %	
	B 地域別	①北海道	3	1.7 %
②東北		11	6.4 %	
③関東甲信越(東京都以外)		45	26.2 %	
④東京都		39	22.7 %	
⑤東海・北陸		13	7.6 %	
⑥近畿		17	9.9 %	
⑦中国		6	3.5 %	
⑧四国		5	2.9 %	
⑨九州		20	11.6 %	
未記入		13	7.6 %	
計	172	100.0 %		
所 属 別	C 大学関係者のみ集計	①大学	120	81.6 %
		②短期大学	9	6.1 %
		③高等専門学校	7	4.8 %
		未記入	11	7.5 %
	計	147	100.0 %	
	D 設置者別	①国立	28	19.0 %
		②公立	13	8.8 %
		③私立	101	68.7 %
		未記入	5	3.4 %
	計	147	100.0 %	
	E 身分別	①教員	28	19.0 %
		②事務職員	84	57.1 %
		③嘱託	7	4.8 %
④その他		24	16.3 %	
未記入		4	2.7 %	
計	147	100.0 %		
F 担当者としての経験年数 (複数回答)	①1年未満	57	37.3 %	
	②1年～2年未満	34	22.2 %	
	③2年～3年未満	23	15.0 %	
	④3年～4年未満	11	7.2 %	
	⑤4年～5年未満	9	5.9 %	
	⑥5年～6年未満	5	3.3 %	
	⑦6年～7年未満	3	2.0 %	
	⑧7年～8年未満	2	1.3 %	
	⑨8年～9年未満	1	0.7 %	
	⑩9年～10年未満	2	1.3 %	
	⑪10年～15年未満	4	2.6 %	
	⑫15年	1	0.7 %	
	⑬20年	1	0.7 %	
計	153	100.0 %		

質問事項		回答	件数	割合	
回答者の内訳	所属別	G 関係団体のみ集計	①公益法人 ②NPO・NGO法人 ③地域・市民団体 ④その他 計	4 1 1 3 9	44.4 % 11.1 % 11.1 % 33.3 % 100.0 %
		H 身分別	①常勤 ②嘱託 ③ボランティア 未記入 計	3 1 3 2 9	33.3 % 11.1 % 33.3 % 22.2 % 100.0 %
		I 担当者としての経験年数	①0.5年 ②4年 ③5年 ④7年 ⑤10年 未記入 計	1 1 1 2 1 3 9	11.1 % 11.1 % 11.1 % 22.2 % 11.1 % 33.3 % 100.0 %
		J その他のみ集計(※)	未記入 計	16 16	100.0 % 100.0 %
アンケート集計結果	Q1 「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」に参加して		①十分満足できた ②概ね満足できた ③あまり満足できなかった ④まったく満足できなかった 未記入 計	51 103 16 0 2 172	35.5 % 54.7 % 5.2 % 0.0 % 4.7 % 100.0 %
	Q2 第1部 シンポジウムについて	SQ1 内容について	①十分満足できた ②概ね満足できた ③あまり満足できなかった ④まったく満足できなかった 未記入 計	51 103 16 0 2 172	29.7 % 59.9 % 9.3 % 0.0 % 1.2 % 100.0 %
		SQ2 時間について	①ちょうどよい ②長すぎる ③短すぎる 未記入 計	135 11 21 5 172	78.5 % 6.4 % 12.2 % 2.9 % 100.0 %
	Q3 第2部分科会について	SQ1 内容について	①十分満足できた ②概ね満足できた ③あまり満足できなかった ④まったく満足できなかった 未記入 計	71 76 11 1 13 172	41.3 % 44.2 % 6.4 % 0.6 % 7.6 % 100.0 %
		SQ2 時間について	①ちょうどよい ②長すぎる ③短すぎる 未記入 計	125 15 20 12 172	72.7 % 8.7 % 11.6 % 7.0 % 100.0 %
	Q4 情報交換会(ランチセッション)について		①十分満足できた ②概ね満足できた ③あまり満足できなかった ④まったく満足できなかった 未記入 計	13 78 63 8 10 172	7.6 % 45.3 % 36.6 % 4.7 % 5.8 % 100.0 %
	Q5 開催時期について		①適当である ②不适当である 未記入 計	138 28 6 172	80.2 % 16.3 % 3.5 % 100.0 %
	Q6 会場について		①適当である ②不适当である 未記入 計	157 10 5 172	91.3 % 5.8 % 2.9 % 100.0 %

質問事項		回答	件数	割合	
アンケート集計結果	Q7 日程はどの程度が適当か	①半日	27	15.7 %	
		②1日	113	65.7 %	
		③1泊2日	26	15.1 %	
		④その他	1	0.6 %	
		未記入	5	2.9 %	
		計	172	100.0 %	
	Q8 「集い」の 開催に関 して	SQ1 継続開催について	①毎年続けてほしい	153	89.0 %
			②続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい	14	8.1 %
			③実施する必要はない	0	0.0 %
			④その他	0	0.0 %
			未記入	5	2.9 %
			計	172	100.0 %
	SQ2 今後の参加について	①ぜひ参加したい	94	54.7 %	
		②できれば参加したい	70	40.7 %	
③参加したくない		0	0.0 %		
④その他		2	1.2 %		
未記入		6	3.5 %		
計		172	100.0 %		

※：その他のみ集計は、所属未記入である。

アンケート集計結果 詳細

平成17年度 学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集いのアンケートについて、回答があったものの詳細をまとめたものである。回答の詳しい割合、個別意見などは、以下のとおりである。

- 平成17年12月8日（木）開催（東京国際交流館プラザ平成）
- 参加者人数 201名
- 回答者数 172名
- 回収率 85.6%

※結果数値（%）表章単位未満を四捨五入してあるため、内訳の合計が計に一致しないことがある。

1. 回答者の内訳

* 性別

	回答数	割合
男	92	53.5%
女	69	40.1%
不明	11	6.4%
全体	172	100.0%

A 年齢別

	回答数	割合
10・20歳代	67	39.0%
30歳代	38	22.1%
40歳代	34	19.8%
50歳代	17	9.9%
60歳代	10	5.8%
70歳代以上	0	0.0%
未記入	6	3.5%
全体	172	100%

B 地域別

	回答数	割合
北海道	3	1.7%
東北	11	6.4%
関東甲信越(東京都以外)	45	26.2%
東京都	39	22.7%
東海・北陸	13	7.6%
近畿	17	9.9%
中国	6	3.5%
四国	5	2.9%
九州	20	11.6%
未記入	13	7.6%
全体	172	100.0%

所属別

C 大学関係者のみ集計

	回答数	割合
大学	120	81.6%
短期大学	9	6.1%
高等専門学校	7	4.8%
未記入	11	7.5%
全体	147	100.0%

D 設置者別

	回答数	割合
国立	28	19.0%
公立	13	8.8%
私立	101	68.7%
未記入	5	3.4%
全体	147	100.0%

E 身分別

	回答数	割合
教員	28	19.0%
事務職員	84	57.1%
嘱託	7	4.8%
その他	24	16.3%
未記入	4	2.7%
全体	147	100.0%

F 担当者としての経験年数（複数回答）

	ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等の担当教職員の経験年数	ボランティアに関する授業や養成講座等の担当部署	学生課・厚生課等ボランティア担当部署の担当教職員	学生のボランティアに関する課外活動団体の顧問教職員	その他	総計	割合
1年未満	18	6	14	10	9	57	37.3%
1年～2年未満	14	6	6	5	3	34	22.2%
2年～3年未満	6	4	7	4	2	23	15.0%
3年～4年未満	3		7	1		11	7.2%
4年～5年未満	2	1	3	2	1	9	5.9%
5年～6年未満	2		1	1	1	5	3.3%
6年～7年未満			1	2		3	2.0%
7年～8年未満	1			1		2	1.3%
8年～9年未満			1			1	0.7%
9年～10年未満					2	2	1.3%
10年～15年未満		1	2	1		4	2.6%
15年				1		1	0.7%
20年					1	1	0.7%
総計	46	18	42	28	19	153	100.0%

G 関係団体のみ集計

	回答数	割合
公益法人	4	44.4%
NPO・NGO 法人	1	11.1%
地域・市民団体	1	11.1%
その他	3	33.3%
全体	9	100.0%

H 身分別

	回答数	割合
常勤	3	33.3%
嘱託	1	11.1%
ボランティア	3	33.3%
未記入	2	22.2%
全体	9	100.0%

I 担当者としての経験年数

	回答数	割合
0.5年	1	11.1%
4年	1	11.1%
5年	1	11.1%
7年	2	22.2%
10年	1	11.1%
未記入	3	33.3%
全体	9	100.0%

J その他のみ集計 (※)

	回答数	割合
未記入	16	100.0%

※： その他のみ集計は、所属未記入である。

2. アンケート集計結果

Q1 「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」に参加して

	回答数	割合
十分満足できた	61	35.5%
概ね満足できた	94	54.7%
あまり満足できなかった	9	5.2%
全く満足できなかった	0	0.0%
未記入	8	4.7%
全体	172	100.0%

【満足できない理由】

- ・ 講演、シンポジウムがあまり魅力あるものではなかった
- ・ 分科会後にランチセッションをした方が交流できたのでは
- ・ (ノート) テイクが用意してもらえなかったから
- ・ ボランティア活動は学生だけの行動ではない。学生には教育が必要
- ・ 学生ボランティアセンター等の話が多く、ネットワーク関係の話が全面的に出ていなかった
- ・ パネリストなど、わかっているのに言わない一言がある。真の意味で経験を積んだ発言が聞きたい
- ・ 認識の温度差に開きがありすぎた

Q2 第1部 シンポジウムについて

SQ1 シンポジウムはどうでしたか

	回答数	割合
十分満足できた	51	29.7%
概ね満足できた	103	59.9%
あまり満足できなかった	16	9.3%
全く満足できなかった	0	0.0%
未記入	2	1.2%
全体	172	100.0%

SQ2 時間的にはどうでしたか

	回答数	割合
ちょうどよい	135	78.5%
長すぎる	11	6.4%
短すぎる	21	12.2%
未記入	5	2.9%
全体	172	100.0%

【自由記入】

- ・時間の割には内容が多すぎる等時間が短かった(時間に余裕がない)(12)
- ・ボランティアの知識がないため等高次元な話なので理解できなかった(2)
- ・資料が配付されていなかったのが残念(パワーポイントの資料もすべてほしい)(2)
- ・ねらいが多様化し焦点が絞り切れていない(2)
- ・ボランティアセンターの事務系の方にシンポジストになってほしい
- ・フロアからの質問も受けてほしい
- ・シンポジストの視点の相違を同じフォーマットで表した方がより分かりやすい
- ・障害学生支援とボランティアを混同しているのでは
- ・もう少し学生ボランティア活動支援に関連させてほしい
- ・海外におけるボランティアという視点だけでなく、もっと地域に密着した事例を入れてほしい
- ・災害ボランティアの内容も取り上げてほしい
- ・マイクの音声聞き取りにくかった
- ・本校も見習いたい点がたくさんありました
- ・大変参考になり満足しております

Q3 第2部 分科会について

SQ1 参加された分科会はどうでしたか

	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会	第5分科会	分科会未記入	総計	割合
十分満足できた	21	14	10	7	6	13	71	41.3%
概ね満足できた	22	17	11	6	8	12	76	44.2%
あまり満足できなかった	2	2	0	2	3	2	11	6.4%
全く満足できなかった	0	1	0	0	0	0	1	0.6%
未記入	3	2	1	0	1	6	13	7.6%
総計	48	36	22	15	18	33	172	100.0%

SQ2 時間的にはどうでしたか

	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会	第5分科会	分科会未記入	総計	割合
ちょうどよい	36	23	19	11	14	22	125	72.7%
長すぎる	5	3	0	2	1	4	15	8.7%
短すぎる	4	8	3	1	3	1	20	11.6%
未記入	3	2	0	1	0	6	12	7.0%
総計	48	36	22	15	18	33	172	100.0%

【進行・内容等で気づいた点】

○第1分科会

- ・他の方々と話す等時間がほしかった(4)
- ・ボランティアに関する知識が深まった(2)
- ・ディスカッションのためには少人数がよい
- ・参加者の興味を引き付ける発表等がありよかった
- ・知識が豊富で進行もよかった

○第2分科会

- ・情報交換等ディスカッションをしたい(2)
- ・声が小さい時もあるのでマイクを使用してほしい(2)
- ・ボランティアに対して根本的に否定の考えがある
- ・個別討論等もう少しプログラムを練ってほしい
- ・時間が足りない
- ・発表用紙の作成等に時間を使いすぎ
- ・班の人数が多すぎる
- ・(ボランティア)センターの作り方を、事例をとおして教えてほしかった

○第3分科会

- ・同じグループの人等話が気軽にできて良かった(3)
- ・コーディネーション術のテーマに合っていなかった

○第4分科会

- ・グループワークで話し合うことで、問題が共有できてよかった
- ・問題解決にまで至らなかったのも若干消化不良気味
- ・分科会のテーマに沿って進行すべき
- ・もう少し問題を絞って掘り下げるべき(単なる意見交換で終わった)
- ・大学によって取組みの温度差があり、グループ討論しにくかった
- ・もう少し時間がほしい

○第5分科会

- ・司会者の話が長い(班別で話がしたい)
- ・学生ボランティアの話が多く、ネットワーク関係の話が前面に出ていなかった
- ・話すテーマを絞った方がわかりやすい
- ・ちょっと時間が長い

【今後、分科会で取り上げた方がよいテーマ・内容等】

- ・学生が地域社会にできることは
- ・環境問題について
- ・みんなの悩み解決
- ・時宜を得たテーマが必要
- ・学生、大学と地域との関わり連携、協働のあり方(2)
- ・ボランティアセンターとはどのようなものか
- ・大学内にボランティアセンターは必要か、その問題点
- ・障害学生と高等教育支援
- ・学生課職員の日々の業務内容及び取組み方の話
- ・職員として具体的に何が出来るか

Q 4 情報交換会 (ランチセッション) について

	回答数	割合
十分満足できた	13	7.6%
概ね満足できた	78	45.3%
あまり満足できなかった	63	36.6%
全く満足できなかった	8	4.7%
未記入	10	5.8%
全体	172	100.0%

【進行・内容等で気づいた点】

- ・分科会の後の方が(ディナーセッション等)交流しやすい(7)
- ・料理が少ない、ほとんど食べられなかった(7)
- ・(アイスブレイキング・自己紹介等)話をする時間後の方がよかった(5)
- ・あいまいで、会場も広く殺風景。何をどう交流してよいかわかりづらい(4)

- ・食事がしづらい、テーブルを増やしてほしい(3)
- ・名札が見えづらい等、話にくかった(3)
- ・分科会ごとに分ける必要なし、自由に行きたい(2)
- ・名刺交換等の時間がほしい
- ・情報交換できなかった
- ・フリーにし過ぎた
- ・機会を活かしきれず心残り
- ・資料の部数が参加者数に比べて少なかった
- ・シンポジウム等と分科会の方に情報交換会を設定したことはよかった
- ・昨年と違い、分科会ごとにテーブルを分けたのはよかった

Q 5 開催時期について

	回答数	割合
適当	138	80.2%
適当でない	28	16.3%
未記入	6	3.5%
全体	172	100.0%

【適当でないとの回答者の希望開催時期】

時期	回答数
3月	2
4～8月	2
5月または10月	1
5～6月	1
6～7月	1
6月	3
8月	3
8～9月	1
9月	3
10月	2
10～11月	2
11月	3
平日不可	1
土日	1
年末不可	2
全体	28

Q 6 会場について

	回答数	割合
適当	157	91.3%
適当でない	10	5.8%
未記入	5	2.9%
全体	172	100.0%

【適当でないと思われる理由】

- ・少し遠い(7)
- ・都心がよい(2)
- ・駅、空港の近くがよい
- ・広くてきれいだが、女子トイレが混雑した

Q 7 日程はどの程度が適当か

	回答数	割合
半日	27	15.7%
1日	113	65.7%
1泊2日	26	15.1%
その他	1	0.6%
未記入	5	2.9%
全体	172	100.0%

【その他の回答内容】

- ・ 1日でもよいが1泊2日でもよい

Q 8 日本学生支援機構が「学生ボランティアの集い」を継続的に開催することについて

S Q 1 「集い」継続開催について

	回答数	割合
毎年続けてほしい	153	89.0%
続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい	14	8.1%
実施する必要はない	0	0.0%
その他	0	0.0%
未記入	5	2.9%
全体	172	100.0%

S Q 2 今後の「集い」参加について

	回答数	割合
ぜひ参加したい	94	54.7%
できれば参加したい	70	40.7%
参加したくない	0	0.0%
その他	2	1.2%
未記入	6	3.5%
全体	172	100.0%

【その他意見・要望・感想等】

- ・現在の状況と今回の内容がかけ離れていたのもっと知識を深めてから参加すればよかったと反省している
- ・他の大学・団体の方と意見を交換することができ、とてもよい体験ができました
- ・本当によい経験になりました。このような機会をより多くの人に与えるべきだと思います
- ・多くの情報を楽しみながら得ることができた。楽しかった
- ・今後もこの集いは続けてください。運営されている皆様、お疲れ様でした
- ・有意義な経験ができ、非常によかった

- ・ボランティア活動の継続方法について、正解を決めることは難しいのでしょうか
- ・宿が確保できる時期に実施で助かりました。
- ・とてもいろんな人の意見が聞けてよかった。みんな自分の意見を発表し、また、しっかり自分の意見をみんな持っていたことは、すごいと思った。早く学校に帰ってボランティアセンターのみんなに話したい
- ・午後からスタート、又は昼終了が時間調整しやすい(日帰りは少しタイト)
- ・内容については、各校の進み方が違うと思うので、センター等スタートしているところと、これからの所で分けてもよいかと思う
- ・たくさんの情報をいただき勉強になりました
- ・もう少し分科会のテーマを掘り下げて意見交換ができる運営形態をとってほしかった
- ・交流を広げ、今後のネットワーク作りには役立つ
- ・ワークキャンプをできる場をもっとも設けてほしかった
- ・今日は色々な角度からお話が聞けてよかった
- ・障害当事者も参加するから、そのバリアフリーの考慮を希望する
- ・大学、学生、地域、障害者、それぞれ交えて実施した方がよいのではないかと
- ・定員をもっと増やしてほしい(参加できなかった方もたくさんいました)
- ・もっと学生が参加できるといい
- ・学生が参加することを前提にしたアンケートを作成してほしい
- ・分科会の内容はとてもよかった
- ・各大学の現状、課題、システムなどの話を聞く機会がほしい
- ・全体的にボランティアをまだ分かっていない方が多い
- ・全国から学生が集まり、話すことができたので、いろいろな情報を得られた
- ・定期的にこのような会に参加すべきである。毎年参加したい
- ・学生、職員限定することなく参加できるこの集いはよい
- ・参加者がフレンドリーでなごやかな雰囲気が好きと感じた
- ・食事の量が充分でなかったと思う
- ・一番の問題として、組織的な障害がある。そこを解決しないことには壁を打ち破れないと思う
- ・もう少し具体的な立ち上げ方法を聞いてみたかった
- ・他大学との交流は、本当に意見を交換するのによいと思う
- ・年に1回ではなく、回数を増やす等、各大学の取組みについて紹介してはどうか
- ・ボランティアセンターの現状等、その時のテーマについてアンケートを実施してはどうか
- ・学生ボランティアの活動内容、方向性、課題について関係者が一堂に集まり話し合う場は必要と考える
- ・広くこの集いの存在をアピールして、たくさんの人が集まればよいと思う
- ・日本版キャンパス・コンパクトができることを期待する
- ・具体的な情報が得られてよかった
- ・可能なら、東西2分科会(ブロック別)にした集いがあるとよい
- ・いろいろな関係者の方の話が聞けてよかった
- ・障害学生に対するサポートの話をしているのに、その学生に対する保障がないのはおかしい。情報保障が必要と思う

- ・来年4月からボランティア活動の授業を担当するので大変参考になった
- ・大変充実した内容であった
- ・とても勉強になり、いろいろ刺激を受けました
- ・分科会で立場も地域も全く異なる人と話げたのでよかった
- ・全社協を共催に入れて、より深いネットワークの構築を願う
- ・交流含みであれば近隣県での班分けにしてほしい
- ・リラックスした暖かい雰囲気楽しく学び合うことができた
- ・グループで、テーマを基にして一つのポスターを作製していく作業はとてもよかった
- ・シンポジウム、講演の時に居眠りをしている人がいた
- ・ボランティアコーディネーターについて、もっと詳しく知りたかった
- ・(他大学との)情報交換会の場が、より多くあればよかったのでは
- ・熱く語り合えてよかった
- ・学校関係者が多かったので、民間機関にも参加してほしい
- ・1日実施でよいですが、2会場あればよかった
- ・具体例の発表(失敗談も含め)がもう少しあればよかった
- ・ボランティアセンターのある大学と、必要か迷っている大学と、分けた内容の討議テーマを設定した方がよい
- ・(この集いは)研修会なのか。であるとしたら何を学ぶことが目的なのか
- ・大学のコスト管理(資源の有限性)の観点は必要ないのか
- ・ボランティアさせるためのインセンティブ作りという発想は正しいのか
- ・対象は一部の熱心な学生? 大多数の冷やかな学生?
- ・もう少し充分に話し合いたかった
- ・いろいろな学生と出会えてよかったが、もっと実際ボランティアセンターを組織している学生に会えたら、よりよかった
- ・ランチセッションより分科会を長くした方がよかった
- ・知り合った後のランチセッションであれば有意義だと思う。今回の昼は間がもたない
- ・終了時刻を早め、ランチセッションを短縮してもよい(分科会を途中で帰る人が多かった)
- ・学生がグループにいて、学生の生の声が聞けたのがとても実践的でよかった
- ・学生が主体なのに、平日だと参加しにくい
- ・ボランティアがテーマなのにサポート体制が何もないのはおかしい(手話通訳、ノートテイク等必要)
- ・同じ問題を抱える方々と話し合う機会を作っていただいてありがたい

【アンケートのお願い】

本日は、お忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございました。

今後の企画立案の参考といたしたく、恐れ入りますが、アンケートにご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

(注) 該当する選択肢を1つだけ選んでお答えください。

<ご記入者>

* 性別 男・女

- A 1 10・20歳代 2 30歳代 3 40歳代 4 50歳代 5 60歳代 6 70歳以上
 B 1 北海道 2 東北 3 関東甲信越(東京都以外) 4 東京都 5 東海・北陸
 6 近畿 7 中国 8 四国 9 九州

(CからFまでは大学関係者の方のみ、当てはまるもの1つをお答えください。)

- C 1 大学(大学・短期大学併設で両方の校名で出席の場合を含む) 2 短期大学 3 高等専門学校
 D 1 国立 2 公立 3 私立
 E 1 教員 2 事務職員 3 嘱託 4 その他()
 F 担当者としての経験年数
 ① ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等の担当教職員 (担当歴 約 年)
 ② ボランティアに関する授業や養成講座等の担当教職員 (担当歴 約 年)
 ③ 学生課・厚生課等ボランティア担当部署の担当教職員 (担当歴 約 年)
 ④ 学生のボランティアに関する課外活動団体の顧問教職員 (担当歴 約 年)
 ⑤ その他 (担当歴 約 年)

(GからIまでは、団体関係者の方のみ、当てはまるもの1つをお答えください。)

- G 1 自治体(公社含む) 2 公益法人(財団・社団・社会福祉法人など)
 3 NPO・NGO法人 4 地域・市民団体(法人化されていないもの)
 5 その他()
 H 1 常勤 2 非常勤(パート・アルバイト含む) 3 嘱託 4 ボランティア
 5 その他()
 I 担当者としての経験年数 (担当歴: 約 年)

Q1. 最初に、「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」に参加して(全体的に)

- 1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった
 3、4の場合は理由をご記入ください。
 ()

Q2. 第1部 シンポジウムについて

SQ1. シンポジウムはどうでしたでしょうか。

- 1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった
 * 進行・内容等でお気づきの点がありましたらご記入ください。
 ()

SQ2 時間的にはどうでしたでしょうか。

- 1 ちょうどよい 2 長すぎる 3 短すぎる

Q3. 第2部 分科会について（参加された分科会 ⇒ 第__分科会）

SQ1. 参加された分科会はどうでしたでしょうか。

- 1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった

* 進行・内容等お気づきの点がありましたらご記入ください。

()

* 今後、分科会で取り上げたほうが良いテーマ・内容等がありましたらご記入ください。

()

SQ2. 時間的にはどうでしたでしょうか。

- 1 ちょうどよい 2 長すぎる 3 短すぎる

※ 次に、今回の企画そのものについてお尋ねします。

Q4. 情報交換会（ランチセッション）はどうでしたでしょうか。

- 1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった

* 進行・内容等お気づきの点がありましたらご記入ください。

()

Q5. 開催時期はどうでしょうか。

- 1 適当 2 適当ではない（2の場合、適当と思われる時期 ⇒ 月頃）

Q6. 会場はどうでしたでしょうか。

- 1 適当 2 適当ではない
2の場合、適当でないと思われる理由をご記入ください

()

Q7. 日程はどのくらいが適当でしょうか。

- 1 半日 2 1日 3 1泊2日 4 その他 ()

Q8. 日本学生支援機構が、今後も「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」を継続的に開催することについて

SQ1. あなたは日本学生支援機構に、今後もこのような「集い」を続けてほしい、と思いますか。

- 1 毎年続けてほしい 2 続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい
3 実施する必要はない 4 その他 ()

SQ2. あなたは、今後もこのような「集い」に参加したいと思いますか。

- 1 ぜひ参加したい 2 できれば（機会があれば）参加したい
3 参加したくない 4 その他 ()

※ その他ご意見、ご要望、ご感想等ございましたらご記入ください。

()

参加者内訳

◆平成17年度「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」出席者内訳

	男	女	計
大学・短期大学等	86	59	145
ボランティア関係機関・団体	4	5	9
学 生	21	26	47
小 計	111	90	201
講演者	1	0	1
シンポジスト・コーディネーター	6	2	8
小 計	7	2	9
総 計	118	92	210

◆大学・短期大学等内訳

		男	女	計
国 立	大 学	16	4	20
	高等専門学校	7	0	7
	小 計	23	4	27
公 立	大 学	7	3	10
	小 計	7	3	10
私 立	大 学	53	43	96
	短期大学	3	9	12
	小 計	56	52	108
総 計		86	59	145

◆分科会別内訳

	男	女	計 (学生数)
第1分科会	33	27	60 (0)
第2分科会	28	20	48 (7)
第3分科会	17	16	33 (9)
第4分科会	19	11	30 (2)
第5分科会	16	14	30 (29)
総 計	113	88	201 (47)

参加大学・機関等一覧

(順不同)

大学・短期大学・高等専門学校

129校・192名

愛知大学	山梨学院大学	中央大学	福島大学
茨城キリスト教大学	山梨大学	長岡技術科学大学	法政大学
横浜国立大学	実践女子大学	長岡大学	北海道医療大学
活水女子大学	淑徳大学	追手門学院大学	北九州市立大学
鎌倉女子大学	駿河台大学	鶴見大学	名古屋学芸大学
関西大学	女子栄養大学	帝京大学	名古屋女子大学
岐阜県立看護大学	昭和女子大学	帝京平成大学	名古屋大学
宮崎公立大学	松山大学	帝塚山大学	明海大学
宮崎大学	上越教育大学	田園調布学園大学	明治大学
京都産業大学	上智大学	島根県立大学	明星大学
京都文教大学	常磐大学	東海大学	鳴門教育大学
共立女子大学	新潟医療福祉大学	東京家政大学	立教大学
玉川大学	新潟大学	東京家政大学・短期大学部	立命館大学
金沢大学	神戸親和女子大学	東京経済大学	鈴鹿医療科学大学
九州大学	神戸外語大学	東京工芸大学	佛教大学
九州保健福祉大学	神奈川大学	東京女子体育大学	愛国学園短期大学
駒澤大学	成蹊大学	東京女子大学	育英短期大学
熊本大学	清泉女子大学	東京農業大学	香川短期大学
群馬県立県民健康科学大学	聖隷クリストファー大学	東北学院大学	実践女子短期大学
恵泉女学園大学	静岡産業大学	東北工業大学	女子栄養大学短期大学部
慶應義塾大学	石巻専修大学	東洋英和女学院大学	小田原女子短期大学
敬和学園大学	仙台大学	東洋大学	正眼短期大学
県立広島大学	洗足学園音楽大学	藤女子大学	聖セシリア女子短期大学
県立長崎シーボルト大学	早稲田大学	藤田保健衛生大学	東京文化短期大学
広島経済大学	相模女子大学	南九州大学	富山福祉短期大学
広島国際大学	総合研究大学院大学	日本女子体育大学	秋田工業高等専門学校
弘前大学	大阪経済大学	日本女子大学	鹿児島工業高等専門学校
国際医療福祉大学	大阪市立大学	日本大学	木更津工業高等専門学校
国際教養大学	大阪成蹊大学・短期大学	浜松医科大学	新居浜工業高等専門学校
佐賀大学	大正大学	武蔵野大学	詫間電波工業高等専門学校
埼玉県立大学	大分大学	福岡工業大学	函館工業高等専門学校
山口県立大学	筑波大学	福岡大学	舞鶴工業高等専門学校
山口大学			

ボランティア関係団体等

8団体・9名

川崎市高津社会福祉協議会	ボランティアセンター武蔵野
長崎県社会福祉協議会	社会福祉法人世田谷ボランティア協会
NPO 法人山梨県ボランティア協会	東京ボランティア・市民活動センター
大分県社会福祉協議会	ボランティアをする学生を支援するネットワーク (SVnet)